

第5章 面接調査

この章では、少年院出院者を対象に実施した面接調査の結果を紹介する。

面接調査においては、非行からの離脱を維持している者がこれまでの出来事や自分自身についてどのように捉え、将来にどのような見通しを持っているのか、また、それらが時間的経過によりどのように変化するかを把握するとともに、非行からの離脱を促進する出来事、それを阻害する出来事、少年院在院中の生活及び保護観察をどのように受け止めているのかを本人から直接聞き取ることで、少年院出院後に立ち直っている者の特徴を明らかにし、今後の処遇の在り方を検討するための情報を得ることを試みている。

第1節 調査の概要

1 調査の方法

(1) 調査対象者及び調査方法

平成25年1月から同年3月までの間に全国の少年院を仮退院により出院した者のうち、面接調査に同意した者を対象とした。

調査実施に先立って、文書又は口頭により、調査への協力は任意であること、回答内容は秘密事項として扱われ、処遇（少年院における処遇又は保護観察所による処遇）に影響したり、個人の回答が面接担当者及び研究担当者以外に知られたりすることがないことを説明して調査への協力を依頼し、協力の意思を示した者に調査を実施した。また、面接調査時の応答をICレコーダーに録音することについて、面接実施前に説明し、録音を承諾した者のみを調査対象とした。

ア 平成26年度面接調査

(ア) デシタンス群調査

調査対象者のうち、調査実施時点において少年院に再入院していない者を「デシタンス群」として、面接調査を実施した。調査は、平成26年11月から27年2月の間に、全国の少年鑑別所の相談室等において行った。調査実施時間は120分間を目安とし、心理学の専門知識を有する少年鑑別所の心理技官又は法務総合研究所の研究官が担当した。

(イ) 再入院群調査

調査対象者のうち、調査実施時点において少年院に再入院していた者を「再入院群」として、面接調査を実施した。調査は、平成26年11月から27年3月にかけて、当該調査対象者が在院している少年院の面接室等において行った。調査実施時間は120分間を目安とし、法務総合研究所の研究官が担当した。

イ 平成28年度面接調査

調査対象者のうち、調査実施時点において少年院に再入院していない者を「デシタンス群」として、面接調査を実施した。調査は、平成28年11月から29年2月にかけて、全国の少年鑑別所の相談室において行った。調査実施時間は120分間を目安とし、心理学の専門知識を有する少年鑑別所の心理技官又は法務総合研究所の研究官が担当した。

(2) 調査内容

面接調査は、面接者が予め決められた質問項目を読み上げ、調査対象者がそれに対して自由に回答し、必要に応じて面接者が追加質問を行う方法で行った。質問項目の概要は以下のとおりである（導入説明及び質問項目の詳細については、本章第2節参照）。

ア 平成26年度面接調査

平成26年度面接調査では、「これまでの人生の中で特徴的な場面」、「現在の生活状況」及び「将来の脚本」の三つの分野において、以下の八つの質問項目を設けている。なお、質問項目の作成にあたっては、ダン・マックアダムスの「ライフ・ストーリー・インタビュー」を参考にした（McAdams, D. P., 2008）。

(ア) これまでの人生の中で特徴的な場面

- Q 1 最高の経験
- Q 2 最低の経験
- Q 3 転換点

(イ) 現在の生活状況

- Q 4 出院後大変だったこと
- Q 5 出院後うれしかったこと
- Q 6 影響を与えた出会い

Q7 興味を持っていること

(ウ) 将来の脚本

Q8 将来に向けての夢，希望，計画

イ 平成28年度面接調査

平成28年度面接調査では、26年度面接調査における質問項目（Q1～Q8）に加え、「非行からの離脱」、「非行からの離脱を阻むもの」、「少年院生活，保護観察の受け止め」、「自己像」及び「調査協力の理由」の五つの分野において、次の九つの質問項目を設けている。

(ア) 非行からの離脱

Q9 非行をやめようと思ったきっかけ

Q10 非行をしないでいられる理由

Q11 非行をやめようという気持ちが強くなる時

(イ) 非行からの離脱を阻むもの

Q12 立ち直りを邪魔するもの

Q13 立ち直りのために我慢したこと

(ウ) 少年院生活，保護観察の受け止め

Q14 少年院生活の受け止め

Q15 保護観察の受け止め

(エ) 自己像

Q16 昔の自分について

(オ) 調査協力の理由

Q17 調査協力の理由

2 分析の方法

面接場面をICレコーダーで録音し、再生可能であったものについて、録音された音声を逐語的に文字化した上で、調査対象者の回答内容を分析した。

3 面接対象者の基本的属性

面接対象者の基本的属性は、以下のとおりである。

(1) 平成26年度面接調査

平成26年度面接調査の対象者は、デシスタンス群が18人（男子16人，女子2人），再入院群が35人（男子34人，女子1人）であった。

少年院出院時（平成25年1月から同年3月まで）の年齢は，デシスタンス群が平均16.8歳（最小値15，最大値20），再入院群が平均16.5歳（最小値15，最大値18）であり，面接調査時の年齢は，デシスタンス群が平均18.6歳（最小値17，最大値22），再入院群が平均18.5歳（最小値17，最大値20）であった。

デシスタンス群について，少年院出院時から面接調査実施時までの期間を見ると，平均21.9月（最小値20，最大値24）であり，いずれも，その間に少年院への再入院はなかった。また，面接調査時に併せて実施した質問紙調査において，「法律で禁じられているような『悪い』こと」についての考えを尋ねたところ，「すでにやめており，今後もすることはない」と回答した者が13人，「まだやめていないが，絶対にやめるつもりだ」と回答した者が3人，無回答が2人であった。なお，この設問については，調査対象者は，面接調査担当者から回答内容が見えない状況で回答を記載し，自身で封緘した上で調査票を提出している。

デシスタンス群について，面接調査時の婚姻状況は，既婚（事実婚を含む。）が2人，未婚・離死別が16人であった。就労状況は，有職者が17人，無職者が1人であった。有職者について，雇用形態を見ると，正規職員が7人，契約社員が3人，派遣社員が1人，パート・アルバイトが6人であった。

本件非行名（平成25年1月から同年3月までに出院した少年院の少年院送致決定に係る非行名をいう。以下この節において同じ。）を見ると，デシスタンス群では，窃盗が7人（38.9%）と最も多く，次いで，傷害，強制わいせつがそれぞれ3人（16.7%）であった。再入院群では，窃盗が16人（45.7%）と最も多く，次いで，傷害が7人（20.0%），強盗，道路交通法違反がそれぞれ3人（8.6%）であった。非行歴は**5-1-3表**のとおりである。

5-1-3表

面接調査対象者の非行歴

非 行 歴	平成 26 年度面接調査対象者		平成 28 年度 面接調査対象者
	デシスタンス群	再入院群	
総 数	18 (100.0)	35 (100.0)	11 (100.0)
少年鑑別所入所回数			
1 回	8 (44.4)	15 (42.9)	7 (63.6)
2 回	6 (33.3)	12 (34.3)	2 (18.2)
3 回以上	4 (22.2)	8 (22.9)	2 (18.2)
保護観察歴			
なし	10 (55.6)	17 (48.6)	6 (54.5)
1 回	4 (22.2)	16 (45.7)	3 (27.3)
2 回	3 (16.7)	2 (5.7)	2 (18.2)
3 回以上	1 (5.6)	—	—
少年院送致歴			
なし	15 (83.3)	31 (88.6)	9 (81.8)
1 回	3 (16.7)	3 (8.6)	2 (18.2)
2 回	—	1 (2.9)	—
初発非行時期			
中学入学以前	8 (44.4)	18 (51.4)	8 (72.7)
中学入学以降	9 (50.0)	17 (48.6)	2 (18.2)
不明	1 (5.6)	—	1 (9.1)

注 1 本件非行により少年鑑別所に入所した時点での非行歴である。
2 () 内は、各群の「総数」に対する構成比である。

(2) 平成28年度面接調査

平成28年度面接調査の対象者は、11人（男子10人、女子1人）であった。

面接調査時の年齢は、平均20.8歳（最小値19、最大値24）であった。平成25年1月から同年3月の少年院出院時の年齢は、平均16.9歳（最小値15、最大値20）であった。

平成28年度面接調査対象者のうち、平成25年1月から同年3月に少年院を出院してから、面接調査実施時までの間に少年院に再入院した者は4人おり、再入院の回数は、1回が3人、2回が1人であった。再入院した者の最終出院時から面接調査実施時までの期間は、17月の者が1人、22月の者が2人、24月の者が1人であった。再入院した者についても、少なくとも17月間は、非行から離脱していると推測されたため、「デシスタンス群」とみなして分析の対象とした。

平成25年1月から同年3月に少年院を出院してから、面接調査実施時までの間に少年院に再入院していない者（7人）では、出院時から面接調査実施時までの期間は、平均46.6月（最小

値44, 最大値48) であり, 平成28年度面接調査対象者全体での, 最終出院時から面接調査実施時までの期間は, 平均37.4月(最小値17, 最大値48)であった。

また, 面接調査時に併せて実施した質問紙調査において, 「法律で禁じられているような『悪い』こと」についての考えを尋ねたところ, 全員が「すでにやめており, 今後もすることはない」と回答した。なお, この設問については, 調査対象者は, 面接調査担当者から回答内容が見えない状況で回答を記載し, 自身で封緘した上で調査票を提出している。

面接調査時の婚姻状況は, 既婚(事実婚を含む)が2人, 未婚・離死別が9人であった。就労状況は, 全員が有職であった。雇用形態を見ると, 正規職員が4人, 契約社員が1人, 派遣社員が1人, パート・アルバイトが5人であった。

本件非行名を見ると, 窃盗が4人(36.4%)と最も多く, 次いで, 強制わいせつが3人(27.3%)であった。非行歴は**5-1-3表**のとおりである。

なお, 平成28年度面接調査対象者のうち, 26年度面接調査にも参加した者は4人(男子のみ)であった。その出院時年齢は平均16.0歳(最小値15, 最大値17), 26年度面接調査時の年齢は平均17.8歳(最小値17, 最大値19), 少年院出院時からの期間は平均22.0月(最小値21, 最大値24), 28年度面接調査時の年齢は平均19.8歳(最小値19, 最大値21), 少年院出院時からの期間は平均47.3月(最小値46, 最大値48)であった。また, 平成25年1月から同年3月の間に少年院を出院した後, 少年院に再入院した者はいなかった。

4 本章の構成

本章では, 第2節において, 非行から離脱している者の回答の傾向について把握するため, 平成26年度面接調査におけるデシスタンス群の回答内容(Q1~Q8)及び28年度面接調査における回答内容(Q9~Q17)を分析する。第3節においては, 非行から離脱している者の回答の特徴を明らかにするため, 26年度面接調査におけるデシスタンス群の回答内容と再入院群の回答内容を比較して分析する。第4節においては, 非行から離脱している者の回答が, 時間の経過によりどのように変化するかを見るため, 26年度面接調査及び28年度面接調査の両方に参加した者の回答内容の変化について分析する。そして, 第2節から第4節の結果を踏まえて, 第5節において, 非行から離脱している者が, これまでの出来事や自分自身についてどのように捉え, 将来にどのような見通しを持っているのかなどについての特徴をまとめ, 今後の処遇の在り方を検討する上での情報を得ることを試みている。

参考文献

McAdams, D. P. (2008). The Life Story Interview. The Foley Center for the Study of Lives, Northwestern University. Retrieved from <https://www.sesp.northwestern.edu/foley/instruments/interview/> (February 2, 2018.)

第2節 調査の結果

— 立ち直りの過程にある者の語りの傾向 —

この節においては、出院後、立ち直りの過程にある者が、これまでの出来事や自分自身についてどのように受け止めているか、また、立ち直りについてどのように捉えているかなどについて、平成26年度面接調査及び28年度面接調査の回答内容を紹介し、その傾向をまとめる。

回答内容の分析に当たっては、質問ごとに、複数の調査対象者に共通して見られる回答内容をカテゴリーとして抽出した上で、そのカテゴリーに該当する内容に言及した調査対象者の数を計上している。例えば、「Q1 最高の経験」については、「家族」、「友人・知人」、「達成・スポーツ」、「就労・就学」のカテゴリーが抽出され、「高校に合格して家族に祝福された」というエピソードを語った者は、「家族」と「就労・就学」の二つのカテゴリーに計上されている。

カテゴリーの抽出は、3人の研究担当者が回答内容を読み込んだ上で独立して行い、その結果を踏まえて協議した結果、適切と考えられるものを選定した。計上作業は、選定されたカテゴリーを用いて、研究担当者3人が独立して行い、3人の計上結果が一致しない場合は協議した上で、最終的に研究担当者3人が一致した結果を計上している。

なお、回答内容は、面接者の質問に対して調査対象者が自由に回答した結果であるため、ある経験が語られていない場合でも、そのような経験がないとは解釈できない点に留意する必要がある。

面接調査実施に当たっては、以下のとおり導入説明を行った。

導入説明

あなたのこれまでの人生について、少し詳しく教えてもらえればと思います。たとえば、あなたの人生が小説やドラマだとします。あなたはその小説やドラマの主人公だと想像してみてください。その小説やドラマには、いろいろな場面が出てきますね。小説やドラマでは、大切な場面があります。「あのときのあの出来事が大切」だとか、「あそこで起きた事件が大切」だとか、そのような場面があなたにも、たぶんあるのではないかと思います。人生のなかで大切な場面というのは、あなたにとってとてもいいことかもしれないし、悪いことかもしれません。あなたにとって忘れられない場面かもしれません。これからお聞きするいくつかの大切な場面について、いつ、どこで、なにが起こったのか、そこには誰が関わっていたのか、その時あなたはどのように考え感じたのかを、できるだけ詳しく話してもらいたいと思います。その場面があなたの人生の中で、どうして大切だと考えるのか、その場面では、あなたはどんな人だったのか、なるべく具体的に教えてください。

1 平成26年度面接調査の回答状況

この項では、平成26年度面接調査における調査対象者18人の回答内容を紹介する。

(1) 最高の経験

Q1

あなたのこれまでの人生の中で、特に「これは良かったなあ」という経験を思い出して、そのことについて話してください。あなたのこれまでの人生の中で、最高の経験です。とても幸せに感じたり、うれしかったり、興奮したりした瞬間です。その最高の経験を、できるだけ詳しく教えてください。いつ、どこで、どんなことが起きて、だれと一緒にいて、あなたはどのように考えたり感じたりしましたか？また、どうしてその場面がとても良かったと思うのか、その場面ではあなたはどんな人だったのかについても、教えてください。

調査対象者18人のうち、出院後の家族との食事、子が生まれたこと、妻との結婚生活等の「家族」に関する回答をした者が7人と最も多く、誕生日を友人に祝ってもらったこと、出院後に真面目な友人ができたことなどの「友人・知人」に関する回答をした者は6人であった。「家族」及び「友人・知人」の双方について回答した者は2人おり、周囲の人間関係全般に対して感謝の気持ちを述べる者もいた。

その他に多かった回答を見ると、スポーツの大会に出場し優勝したこと、運転免許を取得したことなどの「達成・スポーツ」に関する回答をした者が6人、高校入試に合格したこと、働いた結果としてボーナスをもらったことなどの「就労・就学」に関する回答をした者が6人であった。また、その他に、「少年院を出る朝に、先生方から頑張れよと声を掛けてもらった。つらいこととか、きついこととかもあったけど、応援されてるっていう感じがすごくうれしかった。」や「世界遺産の場所に行ったときに、すごい行ってみたかったところに行けたので、不思議な気持ちだった。幸せというか。何か自分が住んでいる町とは全然違う。すごい神聖な場所に感じれるっていう感じ。」といった回答もあった。

次に、各カテゴリーごとに回答の内容を見ると、「家族」では、同カテゴリーについて言及した7人のうち、自身が生まれ育った家族（「原家族」という。以下、この節において同じ。）について回答した者が4人、自身の配偶者や子等の家族（「新しい家族」という。以下、この節において同じ。）について回答した者が3人であり、全体として家族との関係性における肯定的なエピソードについて語る者が多かった。原家族に関するものでは、「出院後に一緒に御飯を食

べたり、普通にできることができたみたい。感動した。」という回答があった。新しい家族に関するものでは、「ずっと子どもが欲しいと思っていた。これからはお父さんになるし、非行とか悪いことばかりして捕まらないで、まずは普通の大人になるよう頑張ろうと思った。」と立ち直りの決意と共に語る者もいた。

「友人・知人」について、その内容を見ると、「(出院後に) 高校に入って、真面目な人たちと関わるのは結構、びっくりしたところもあったし、うまくやっていく自信がなかった。」が、学校生活を通じて交友を深め、「(自分のように) 悪いことしてきた人間でも、友達が変わるだけで自分も何か変わっていくような気がして、実際に変わってきているので、そこはうれしい。」と交友関係が自身の立ち直りに与えた影響について語る者がいた。一方で、「パチンコで勝ったり、みんなでわいわいして、酒を飲んだりして楽しかった。」と友人との享乐的な場面について回答する者もいた。

「達成・スポーツ」について、その内容を見ると、「車の合宿に行ったときに、一発で試験も全部受かって。勉強も頑張って、毎日徹夜して。自分もやればできるって。」などと自身の達成経験やそこから得た達成感について語る者が多かったほか、「(スポーツの試合で) 結果としては負けたけど、今までと違って、自分の中で動けたっていうか、プレッシャーに勝って勝負できた。」などと成功した経験に限らず、物事に取り組む過程で身に付いたことや失敗経験から学んだ内容について回答する者もいた。

「就労・就学」について、その内容を見ると、「(給料について) お金が全てとは言わないけど、やっぱり働いた結果にはつながると思う。あと、仕事をしていて、分からないことを教えてもらって、それを一人でできるようになるのはうれしい。」などと仕事や学業を通じて得た達成感について語る者が多くいた。また、「就学」について言及した4人のうち3人は、少年院出院後の学校生活について語っていた。

「最高の経験」として、対人関係にまつわるエピソードを挙げたのは13人であり、達成経験にまつわるエピソードを挙げた者（6人）と比べて多かった。

「最高の経験」で語られたエピソードの時期を見ると、小学校6年生までの出来事について言及した者は3人、中学以降の出来事を挙げた者が13人であり、そのうち、少年院出院後の出来事に言及した者が11人で最も多かった。また、小学校6年生までの出来事はいずれも「家族」に関するものであった。

「最高の経験」についての回答をまとめると、対人関係における良い思い出を語った者が半数を超えていたが、自身の達成経験について語る者も一定数いた。また、出院後の出来事を語る者が約6割を占め、出院後に良好な経験を積んでいる者が多かった。

(2) 最低の経験

Q2

あなたのこれまでの人生を振り返ってみて、最低、あるいは最悪だったと思う場面を考えてみてください。不愉快かもしれないですが、できるだけがんばって詳しく話してもらえると助かります。いつ、どこで、どんなことが起きて、誰が関わっていましたか？あなたは、どのように考え、感じたのでしょうか。また、その場面がどうしてそんなに悪かったと思うのか、その場面ではあなたはどんな人だったのかを教えてください。

調査対象者18人のうち、事件を起こしたこと、少年院送致処分を受けたことなどの「非行等（非行・問題行動やそれによる一連の法的措置に関する事）」に言及した者が11人、「中学校のときに仲の良かった先輩と突然連絡が途切れ、すごく投げやりな気持ちになった。」「高校の時、みんなに馬鹿にされて、笑われている感じがすごく悔しかった。」といった「友人・知人」に関する回答をした者が11人と多かった。次いで、両親に迷惑を掛けたことなどの「家族」に関する回答をした者は2人であった。その他に、「小学校4年生の頃に入院して、一番つらかったのが、部屋の中に閉じ込められて、鍵をかけられたりして。」といった回答もあった。また、「言いたくない」と回答した者が1人いた。

次に、各カテゴリーの内容について見ると、「非行等」では、「少年院にいる間も被害者の人に謝るまでは終わりじゃないと思っていた。でも、結果的には親が謝りに行き、自分も仕事を始めたので機会も減って、結局言えずじまいで申し訳ない。それが一番後悔したこと。」「(事件を起こし、少年院に入ったことで) 親を裏切ってしまった、親不孝をしてしまったっていうのが、やっぱり一番自分の中でつらかった。」などのように、非行や問題行動そのものを「最低の経験」として捉えるのではなく、自身の行動の結果、被害を与えたことや周囲に迷惑を掛けたことを悔やむ回答が多く見られた。また、友人からの裏切りが事件の発端であったとして、「友達に裏切られ自分も傷を負ったのに、なんで自分だけが少年院に行かなければならないのかと。被害者のことしか信じないんだなと思った。」などと被害的な受け止めをしている回答もあったが、一方で、「(親族が亡くなったことについて) 少年院の中にいたので、葬儀にも行けなかったのが悲しかった。それがあってからは、少年院を出てからは捕まるようなことは絶対にしないと決めた。」などと回答する者もあり、「最低の経験」をその後の自身の糧にしようとする姿勢がうかがわれる回答も複数あった。

「友人・知人」について、その内容を見ると、大雨の中で学校行事が行われたことを挙げつつ、「クラスの人みんなすごく怒ってたけど、僕は、諦めろよって（気持ちをおさめることができる。）」と「最低の経験」への自分なりの対応やその成長ぶりに言及している者や、「（仲の良かった先輩と連絡が途絶えたことで）投げやりになって、どっちでもよくなって、で、事件があって。」と、「最低の経験」と自身の非行との関連について述べるなど、「最低の経験」がその後に及ぼした影響について言及している者もいた。

「家族」について、その内容を見ると、同カテゴリーについて回答した2人はいずれも原家族について回答しており、「事件を起こして逮捕されて少年院に入ったっていうのは、親も号泣していて、それを見るのもつらかった。」などと家族に迷惑や心配を掛けたことを語っていた。

「最低の経験」について、外的環境に起因する経験と自らの行動等に起因する経験に大別すると、外的環境に起因する経験について語った者は10人、自らの行動等に起因する経験について語った者は7人であった。また、友人に裏切られたことや周囲から受けたいじめなどの調査対象者自身が受けた被害的な体験について回答していた者は5人であった。

「最低の経験」として、対人関係にまつわるエピソードを挙げたのは13人であった。

「最低の経験」で語られたエピソードの時期を見ると、小学校6年生までの出来事について言及した者は1人で、中学以降の出来事を挙げた者が15人であり、そのうち、少年院出院後の出来事に言及した者が2人で、中学入学から少年院出院前までの出来事に言及した者が多かった。

「最低の経験」についての回答をまとめると、「非行等」を最低の経験とした者のエピソードからは、自身の行動によって周囲に悪影響を与えたことを悔やむ姿勢や、それを教訓としていかしていこうとする姿勢がうかがえ、その他の回答でも、その経験が及ぼした影響や、どう対処したかを含めて振り返っている者が目立った。また、「最高の経験」の回答結果と比較すると、双方とも対人関係にまつわるエピソードが多かった点では共通しているが、「最高の経験」では言及している内容にばらつきが見られたところ、「最低の経験」では、「非行等」及び「友人・知人」の2つのカテゴリーに関する回答が目立っていた。

(3) 転換点

Q3

人生を振り返ったとき、「あの時を境目にして、人生が変化した」と感じる場合があります。そのような重要な境目のことを「ターニングポイント」と呼びたいと思います。今、あなたの人生の中でターニングポイントだったと考える場面を思い浮かべてください。もしターニングポイントをはっきりと決めることが難しければ、あなたの人生の中で「何かを変化した」と感じた出来事のことでもかまいません。いつ、どこで、どんなことが起きて、誰が関わっていたのか、そしてあなたはどのように考え、感じたのかを教えてください。その場面では、あなたはどんな人だったのか教えてください。

調査対象者18人の回答を、人生が好転した契機（良い転換）と悪化した契機（悪い転換）に分けると、良い転換について回答した者が13人、悪い転換について回答した者が8人、そのうち、両方について言及した者が3人であった。なお、両方について言及した3人はいずれも、悪い転換の後に良い転換を経験したと語っていた。

ア 良い転換

人生が好転した契機（良い転換）について語った13人について、その好転の内容を見ると、今後捕まるようなことはしないようにしようと思った、夜遊びやたばこをやめたといった「非行からの離脱」について回答した者が5人いたほか、我慢を覚えた、仕事を頑張れる自信がついたといった精神面での成長についての回答も見られた。

人生が好転したきっかけについて見ると、「少年院」について回答した者が9人と最も多く、次いで、子が生まれたことや親族の死等の「家族」について回答した者が3人であった。また、その他にも、「(今の仕事について) 寝坊したら迎えに来て間に合うようにしてくれたりとか、援助してもらってるから、今ここでちゃんと仕事行く癖つけて。変わり時かなって自分で思う。」といった回答もあった。

「少年院」を好転のきっかけとして挙げた者では、「責任感とか忍耐力とかそういうものを身に付けて、社会に戻ったとき仕事を頑張れるようになった。」などと少年院生活を通じた精神面の成長について言及した者が複数いたほか、「(少年院の) 先生達から信頼されていろいろ任されるのが楽しかった。」「少年院の先生が親身に、親みたいな感じで話を聞いてくれて、何で

も言い合えた。」などと法務教官の話題に触れている者が6人いた。

「家族」について、その内容を見ると、「少年院から帰ってきたとき、家族が変わってくれているというか。分かろうとして、向き合ってくれるようになって。」などと家族との関係改善について回答する者がいた。また、同カテゴリーについて回答した3人のうち、原家族について回答した者が2人、新しい家族について回答した者が1人であった。

なお、「良い転換」のエピソードを、契機となった出来事を経験した時期別に見ると、13人全員が中学以降に経験した出来事について言及しており、そのうち、少年院出院後の出来事に言及した者は3人で、うち2人は出院後の家族との関係について語っていた。

イ 悪い転換

人生が悪化した契機（悪い転換）について回答した8人について、そのエピソードの内容を見ると、非行に至った経緯や非行がエスカレートしていったことなどの「非行の深化」について語った者が5人いたほか、不登校になったエピソードなどの回答も見られた。

人生が悪化したきっかけについて見ると、父親の暴力、兄弟の死といった「家族」について回答した者が3人、本件共犯者との出会いなどの「友人・知人」について回答した者が3人であった。

次に、悪化をもたらしたきっかけについて、その内容を詳しく見ると、「家族」では、「(父親からの暴力について) 最初は家族も止めようとしていたけど、その後見て見ぬ振りって感じで。人を信じ切れなくなった。」「いつも御飯とか1人で。寂しいから、振り向いてほしいから夜遊びとか犯罪とかしていた。」といった回答があり、同カテゴリーについて回答した3人全員が原家族との否定的なエピソードについて語っていた。

「友人・知人」について、その内容を見ると、「共犯者の先輩に出会って、自分の居場所というか、面倒を見てくれる、自分の気持ちを理解してくれる人ができてうれしかった。」と、不良交友に傾倒したことがその後の人生の悪化のきっかけになったと回答する者がいた。

なお、「悪い転換」のエピソードを、契機となった出来事を経験した時期別に見ると、小学校6年生までの出来事について言及した者は1人、中学以降の出来事に言及した者は7人、そのうち、少年院出院後の出来事に言及した者が1人で、中学入学から少年院出院前までの出来事に言及した者が多かった。

「転換点」についての回答をまとめると、「良い転換」では、好転の内容として「非行からの

離脱」を挙げる者が一定数おり、好転の契機として、少年院への入院や少年院生活を通じた精神面の成長を挙げる者が多く見られた。一方、「悪い転換」では、悪化の内容として「非行の深化」を語る者が多くおり、悪化の契機として、中学時代の家族関係の不和や不良交友への傾倒を挙げる者が一定数いた。

（４） 出院後大変だったこと

Q4

少年院を出てから今日までのことを思い出してみてください。その中で、あなたが最も大変だったと思うことを一つ、説明してください。何が大変だったのでしょうか。いつ、どこで、どんなことが起きて、誰が関わっていたのか、そしてあなたはどのように考え、感じたのかを教えてください。そして、あなたはどのようにしてその問題を解決したり、処理したりしましたか。その大変だったことは、あなたの人生にとってどのような意味がありますか。

調査対象者18人のうち、仕事の掛け持ち、勉強の遅れを取り戻すことといった「就労・就学」に関する回答をした者が7人と最も多く、昔の友人からの誘いを断ること、新たな交友関係の築き方が分からないことといった「友人・知人」に関する回答をした者が6人、同居する義母との関係、結婚生活の維持といった「家族」に関する回答をした者が3人、被害者への謝罪方法が分からなかったことといった「被害者関係」に関する回答をした者が2人であった。

次に、各カテゴリーの内容について見ると、「就労・就学」では、「作業工程が遅れていて、遅くまで残業していた。肉体労働だし、せかされたりすると大変だった。」などと作業の大変さや身体的なつらさについて回答する者が複数いたが、「仕事だからしゃあないかなって。夜は寝て、極力遊ばないようにした。」「(職場で厳しくされても) すいませんって一言いえばおさまる。」などと自分なりの対処法によってその困難を克服したと語る者や多忙な日々をこなす自分がすごいと思ったなど、肯定的に受け止める者も多くいた。

「友人・知人」について、その内容を見ると、「(高校入学後に学校で) お前少年院に入っていたんだろうと散々言われた。肩身が狭かった。」「学校の友達に、たばことかお酒のことを話しちゃったりして、自分のせいで、友達もちょっとでも悪い道に進んじゃうのかなとか。自分の中に責任感があった。」などと自身の過去の非行に起因する人間関係の難しさについて語る者が6人中3人いた。

「家族」について、その内容を見ると、「出院してからもぶつかって、もう家の雰囲気がぴりぴりしてて、素を出せない自分がある。気を遣って毎日生活してるのが、今も悩んでいる。」「妻が御飯を作ってくれないときがある。子育てを頑張っているのは分かるけど、言い訳が多くて、言い争いになったことがあった。」といった回答があり、現在もその困難が続いている様

子が語られていたが、「いっぱいいっぱいになったときは、保護司さんとか友達とか彼氏とかに話して聞いてもらって、それだけでも大分気持ち楽になった。親は親だから、大変だけど頑張ろうかなって。」と対処法や前向きな姿勢を見せている者もいた。

「出院後大変だったこと」について、解決に向けて何らかの対処をしたとか、自分にとって意味のある経験であったなどと前向きに受け止めている者は12人であった。また、特に大変だということはなかったと回答した者が2人いたが、その内容を見ると、「バイトも、少年院に入る前に料亭とかで働いているから、酷な仕事やってたんで。(出院後にしているアルバイトは)楽。」「職場の人には少年院に入っていた話もしているし、特に苦労はしなかった。」などと述べており、他の調査対象者が「出院後大変だったこと」として挙げた「就労・就学」等の話題にも触れつつ、それらを困難と捉えずに乗り越えている様子が見えてきた。

なお、少年院出院後に起こした交通事故について言及した者が2人いた。また、「出院後大変だったこと」として、対人関係にまつわるエピソードを挙げたのは10人と半数を超えていた。

「出院後大変だったこと」についての回答をまとめると、就労上の身体的なつらさや自身の過去の非行に起因する対人関係の難しさを語る者が一定数いたが、困難な出来事を克服した体験について語る者や大変だった経験自体を肯定的に捉え、糧としている者も多くいた。

(5) 出院後うれしかったこと

Q5

少年院を出てから今日までのことを思い出してみてください。その中で、あなたが最もうれしかったことを一つ、説明してください。何がうれしかったのですか。いつ、どこで、どんなことが起きて、誰が関わっていたのか、そしてあなたはどのように考え、感じたのかを教えてください。

調査対象者18人のうち、父親との関係の改善、妻との出会い、子の誕生等の「家族」に関する回答をした者が8人、やりたかった仕事に就けたこと、高校に合格したことなどの「就労・就学」に関する回答をした者が8人と多かった。次いで、友人が普通に接してくれたこと、友人が誕生日を祝ってくれたことなどの「友人・知人」に関する回答をした者が6人であった。その他、「少年院を出院した瞬間の空気と景色」といった出院そのものに関する回答や、運転免許の取得に関する回答も見られた。

次に、各カテゴリーの内容について見ると、「家族」について回答した8人のうち、原家族について回答した者が4人、新しい家族について回答した者が4人であった。原家族に関するものでは、「父と仲良くなったこと。少年院出院当初は信用がなくて。母が父に対して、(本人は)前とは変わったと言ってくれて、それから御飯に行くようになったりした。」といった家族との関係性における肯定的なエピソードが語られていた。新しい家族に関するものでは、「結婚するなら、もう責任持って最後まで一緒にいてやらなきゃいけないと思って。自分がいなくなったら、生活費とかどうなるかなとか思いだしたら、これはもう悪さはやめないといけないなと思った。」、[(子ができるまでは) 命を軽く見てたっていうか、簡単に人を傷付けていた。]などと新しい家族の存在が非行からの離脱を後押しした旨の回答が複数見られた。また、新しい家族について言及した4人のうち3人が子ができたことについて言及していた。

「就労・就学」について、その内容を見ると、[(就職の際に) 親方に対して、自分に保護観察がついていることを正直に話した。そういうことを知った上で、親方が自分を引き受けてくれたのがうれしかった。]などと、自分を雇用してくれたことに恩義を感じている旨の回答や就職そのものについての回答があった。また、[(移動時間や休憩時間、食事時間も含めて) 自分の予定していたとおりに仕事が進んでいたことが素晴らしかった。]といった、就労から得られる達成感についての回答も見られた。

「友人・知人」について、その内容を見ると、「高校を出てから連絡をとった人は、事件のことを受け入れてくれたっていうか。遊んでくれている。」「自分が捕まっていた話は聞かないでいてくれて、今までどおり普通に接してくれているのがうれしい。」などと、友人が自身の前歴等にかかわらず接してくれたことを好意的に受け止めるエピソードが目立った。また、「友人・知人」について回答した者のうち、交際相手に言及した者が2人いた。

なお、調査対象者18人中6人が、「最高の経験」と共通のエピソードについて語っていた。

また、「出院後うれしかったこと」として、対人関係にまつわるエピソードを挙げたのは14人と大半を占めた。

「出院後うれしかったこと」についての回答をまとめると、出院後の対人関係におけるエピソードについて語る者が多く、中でも、家族との関わりについて挙げる者が多くおり、家族の存在が非行からの離脱を後押ししたとする者が目立った。また、友人については、前歴にかかわらず接してくれたことを好意的に受け止めている様子がかがえた。その他、就労・就学を通じて達成感を得た経験を挙げる者も多かった。

（6）影響を与えた出会い

Q6

少年院にいたときや少年院を出てから今日まで、色々な人と出会ってきたと思います。親や学校の先生や友達、職場の上司や同僚、友達や恋人などと再会したり新たに会ったりしたでしょう。また少年院の先生や保護観察官の先生、保護司の先生などとも出会いましたね。そのような出会いの中で、あなたに一番大きな影響を与えたと思う出会いの場面を一つ思い出してください。それはどんな出会いでしたか。いつ、どんな人と出会って、あなたはどのように考え、感じましたか。どうしてその出会いによって、一番大きな影響を受けたと思うのですか。その出会いはあなたの人生にとってどのような意味があるのか教えてください。

調査対象者18人のうち、「友人・知人」について回答した者が6人、法務教官や保護司といった「処遇者」を挙げた者が6人と多かった。「処遇者」の内訳は、「法務教官」及び「保護司」について回答した者がそれぞれ3人であった。また、「職場の上司等（上司・先輩・同僚）」に言及した者が4人、「家族」に言及した者が2人であり、その他に、「(学校の) 教師」を挙げた者もいた。

内容を詳しく見ると、「友人・知人」では、現在の交際相手について「お互いに悪い状況にいたたので、どちらかが先に更生しないといけないという気持ちがあった。とりあえずこの人のために頑張ろうという気持ちがあった。」、出院後に再会した友達について「何でも話せるようになった。自分のことを心配してくれる人っていうか、味方がいるんだってということが自信につながった。」、学校の友人について「自分がすることに対して、これはよくない、やめた方がいいとちゃんと教えてくれた。その人がいなかったら、自分はまた捕まっていたかもしれない。」と、非行からの離脱過程における友人の存在について回答する者や、友人等との出会いが自己変容のきっかけになったと述べる者がいた。「友人・知人」について回答した者のうち、交際相手に言及した者は1人であった。

「処遇者」について、その内容を見ると、法務教官を挙げた者では、「少年院に来るまでの間は先真っ暗という感じだったが、(少年院の教官が) 自分をちゃんと評価してくれて寄り添ってくれたのが心強かった。」という回答があり、「保護司」を挙げた者では、「何回も捕まって、見捨てられるんだろうなと思っていたが、更生してほしいという手紙をくれたりした。自分の

更生を一番願ってくれた。」などの回答があるなど、全体として、処遇者との関わりそのものや処遇者の受容的な姿勢について肯定的に受け止めているエピソードが多かった。

「職場の上司等」について、その内容を見ると、「昔から格好いいなと思っていたが、一緒に仕事をしたら、プライベートだけじゃなくて仕事の面も見えてきて、こんな人になってみたいと思うようになった。」、「一生懸命仕事を教えてくれるので、自分も頑張ることができた。仕事をどんどん覚えて、周りから仕事できるねと言われて、うれしかった。」、「同じ職場に少年院入院歴のある人がいて、親近感が湧いた。みんな真面目に働いているんだなと思った。」などと、職場の人間関係の中で健全なモデルを見つけ、それが仕事に真面目に取り組む姿勢につながっていることがうかがわれる回答が複数見られた。

「家族」について、その内容を見ると、「(妻について)本気で怒ってくれるから、これはやってはいけないことなんだと思う。自分のことを心配してくれていると思うと、本当に有り難い。」と非行からの離脱における家族の存在の大きさについて語る者もいた。原家族について回答した者と新しい家族について回答した者はそれぞれ1人ずつであった。

なお、調査対象者18人のうち、18人全員が、自身の人生に肯定的な影響を及ぼした出会いについて回答したが、うち1人については、高校の同級生との出会いを挙げ、不良交友が広がりマイナスの影響を受けたことについても併せて回答していた。

「影響を与えた出会い」についての回答をまとめると、全員が肯定的な影響に言及しており、処遇者との出会いを重視している者や職場の人間関係の中で健全なモデルを獲得している者がいたほか、非行からの離脱過程における友人との出会いについて語る者もいるなど、非行からの立ち直りにおいて、人との出会いが果たす役割が大きいことがうかがえた。

(7) 興味を持っていること

Q7

あなたが現在、一番興味を持っていることについて話してください。どんなことですか？あなたはどのようにそのことに興味を持っているのですか。そのことは、あなたの人生にとってどのような意味があるのか教えてください。

調査対象者18人のうち、スポーツをすること、ギターを演奏すること、ツーリングに行くことといった「趣味」に関する回答をした者が8人と最も多かった。次いで、経営者になりたい、資格をとりたい、進学したいなどの「就労・資格取得・就学」に関する回答をした者が6人、子の世話や成長といった「家庭」に関する回答をした者が3人であった。また、その他に、政治に興味があるとして、「若者が全然投票していない。(政治家は)百年、二百年先の日本の未来のことを考えられるような人間じゃないと意味ないんじゃないか。」と回答する者もいた。

次に、各カテゴリーの内容について見ると、「趣味」では、8人中3人が、その趣味によって「嫌なことを全部忘れることができる。楽しすぎて。」「仕事で嫌なことがあっても、ストレスを解消できる。」などと、否定感情の対処について言及していた。また、バイクや車に興味があるとした者が2人いた。

「就労・資格取得・就学」について、その内容を見ると、「(他のことと違い)動物のことになったら全然飽きないので、将来はトリマーになりたい。」などと具体的な職種を挙げる者もいた一方、「将来は出世して、最終的には経営者になりたい。そのためには資格とかとらないといけないと思う。」などと抽象的な回答にとどまる者もいた。

「家庭」について、その内容を見ると、「子どもの面倒を見ること。おむつを替えたり、お風呂に入れてたりすることが楽しい。」と回答する者や、子の成長を見ることが楽しみと回答する者など、新しい家族、とりわけ、自身の子に関する回答が複数見られた。

なお、「(少年院生活を経て)体格が変わり、がっちりした。そこから筋トレにはまった。」「(法務教官について)少年院に入っていたときに、格好良かった印象があり、目指すようになった。」などと少年院生活で何らかの影響を受けた事柄について回答した者が3人いた。また、興味を持っていることは「特にない」と回答した者が1人いた。

「興味を持っていること」についての回答をまとめると、一般的な趣味に関心を持っている者が半数近くであったが、将来を考えて資格取得等に興味を持っている者も多かった。また、趣味がストレス解消に役立つという回答も目立った。

(8) 将来に向けての夢、希望、計画

Q8

あなたの将来に向けた計画、夢や希望等について話してください。あなたは将来、何をしたいと思いますか。

調査対象者18人全員が正社員として働きたい、仕事を続けながら資格取得にも励みたい、独立したいなどと「仕事・資格」に関する回答をした。

「仕事・資格」以外では、進学し、就職について考えたいなどと「進学・学業」に関して言及した者が5人と最も多かった。次いで、就職後に交際相手と結婚したい、家族と住める家を建てたいといった「家庭」に関する回答をした者が4人、一人暮らしをしたいなどと「自立」に関する回答をした者が3人であった。

次に、内容について詳しく見ると、「仕事・資格」では、「(現在の就労先について)今はまだ見習いなので、機械の動かし方を覚えて、まずは正社員になりたい。」「大工で独立するのが一番の目標。ただ、仕事を全て把握するのはそう簡単じゃない。まだ技術不足だから、あと2年くらいで身に付けて独立したい。」などと、現在の就労を継続し、研鑽を積み重ねる中で、独立等の将来につなげていきたいとする回答が多く見られた。また、「将来の夢は、建設業の社長になること。更生を応援したいから、少年院入っちゃったけど、頑張って更生を目指してますっていう人を雇いたい。」などと自身と似た境遇にある者を雇用を通じて支援したいと述べる者や、「(現在の会社について)面接で目を離さずに話を聞いていたところを評価してくれた。学歴や職歴、過去に関係なく、そんなところを見てくれたのは初めての経験で、とりあえずはここで一生懸命やれることを頑張っていこうと思っている。」などと恩に報いるべく現在の仕事を頑張っていると述べる者もいた。

「進学・学業」について、その内容を見ると、「海や水や魚に関わる仕事がしたい。それに向けて、大学を探したりしている。」「とりあえず高校を卒業する予定。中卒だと最終的に現場で働くしかなくなる。」などと近い将来の目標と関連させた進学目標について回答する者が複数いた。

「家庭」については、4人全員が新しい家族について語っており、その内容を見ると、「良い奥さんと出会って、普通の生活がしたい。」「家を作って、車を買って、結婚して、子どもを作って。普通に暮らすことが幸せだと思う。」などと、新しい家族を持つことを具体的な夢として

挙げつつ、「普通の生活」について言及する者が見られた。

「自立」について、その内容を見ると、「とりあえず親から離れて、一人で社会人としてできるようになりたい。一人前とまではいかないけど、一人立ちができれば。」「一人暮らしをしたいと思っているから、給料は安定していないと。」などと就業と関連させて回答する者が複数いた。

「将来に向けての夢、希望、計画」についての回答をまとめると、全員が就労や資格について言及しており、就労については、現在の仕事を続けてステップアップし、将来の夢につなげるという回答も多く、地に足のついた堅実な将来設計をしている様子うかがわれたほか、雇い主の恩に報いたいといった者や、非行少年の更生を支援したいといった思いを持つ者もいた。また、家庭を持つことや「普通の生活」をすることを挙げる者がいたことも特徴的であった。

2 平成28年度面接調査の回答状況

本項では、平成28年度面接調査において調査対象者11人の回答内容を紹介する。

(1) 非行をやめようと思ったきっかけ

Q9

あなたが非行や犯罪をやめようと思ったきっかけは何ですか。いつ、どこで、どんなことがあって、「もうやめよう」と思ったのか、そのとき感じたことや考えたことも、詳しく教えてください。

調査対象者11人のうち、家族にこれ以上迷惑を掛けたくないと思ったなどと「家族」に関する回答をした者が4人、逮捕や少年院に入ったことなどの「処分を受けたこと」に関する回答をした者が4人と多かった。次いで、自分にとって得にならないと感じたからなどと「損得」に関する回答をした者が3人であった。また、アルバイト収入を得るようになったからなどと「就労・就学」に関する回答をした者、年齢を考えると非行をしていられないという気持ちになったなどと「年齢」に関する回答をした者及び将来やってみたい仕事のために非行はできないと考えたなどと「将来設計」に関する回答をした者がそれぞれ2人ずつであった。その他にも、「免許を取ったし、仕事もしていたので、別にお金もあるから」非行をする必要がなかったと回答する者もいた。

内容を詳しく見ると、「家族」では、「自分のことを支えてくれている人がいるので、その人たちが裏切らないために。」「一番でかいのは、家族。母親が泣いている姿を見て、心配してくれてるんだと思った。もう迷惑掛けたくないとか、中（少年院）に入りたくないとかそういうふうに思ったのがきっかけかもしれない。」といった回答が複数あり、家族の存在が非行への心理抑制として働いた旨の回答が見られた。また、同カテゴリーについて回答した4人全員が原家族について、そのうち3人が「親」について言及していた。

「処分を受けたこと」について、その内容を見ると、「（少年院生活について）自由もやっぱりないわけだから、きつかった。」と、非行に対する一連の法的措置による不自由さを嫌う気持ちを挙げつつ、「（資格取得等）すごくいろいろ勉強になったから、今度は、社会で頑張っていかないとなって。」と、少年院生活で得たものを踏まえて、非行をやめようという決意をしたと回答する者もいた。

「損得」について、その内容を見ると、「(非行は) その場では楽しいって思うけど、捕まったときの反動が大きすぎる。先のことを考えるっていうか。結局不利益だなんて。」などと合理的な選択の結果として非行をやめようと思ったとする回答があった。

「就労・就学」について、その内容を見ると、「仕事も始めて、それも楽しかったから、やめないととかではなく、自然にやめた感じ。」などと就労への充実感が非行からの離脱の契機になったとする回答が見られた。

「年齢」について、その内容を見ると、「(出院時に) 18, 19とかになっていたから、そんなこととしていられない時期にもなるから。」などと加齢に伴う自身の認識の変化について回答する者がいた一方、「16とかで悪さをしていたので、周りから何か変な目で見られるなって。」などと周囲からの視線や評価を非行からの離脱の契機として挙げる者もいた。

「将来設計」について、その内容を見ると、将来就きたい具体的な職業を挙げた上で、「もう絶対に犯罪をやらないと決意が固まったのは、この目標ができたとき。」と回答する者と、「(非行を) やめようっていう感じよりも、(少年院を) 出た後のこと考えて、こういうことをしてみたいっていうのを考えていると、自然に非行のことは考えなくなった。」と明確な契機に言及しない者がいた。

「非行をやめようと思ったきっかけ」として、対人関係に言及した者は7人であった。

「非行をやめようと思ったきっかけ」についての回答をまとめると、家族、特に両親の存在が大きかったとする者が多かったほか、処分を受けたことがきっかけになったという者や、非行により失うものに言及する者もいた。また、きっかけを明確に意識していない者もいるものの、自身の将来や年齢、やりたいことに目が向いたことが離脱につながっている者もいた。

(2) 非行をしないでいられる理由

Q10

あなたが非行や犯罪をしない生活を続けられるのは、なぜですか。非行や犯罪をすることが自分にとってマイナスだと思っている人もいれば、他に大切なものがあると思っている人もいるかもしれません。いくつかの理由があるかもしれませんが、今、あなたが非行や犯罪をしないでいられる理由について、教えてください。

調査対象者11人のうち、職場の人に迷惑を掛けたくない、アルバイトや勉強等やりたいことがあるといった「就労・就学」に関する回答をした者が6人と最も多く、次いで、両親を裏切ることにはできないからなどと「家族」に関する回答をした者が3人、「犯罪をしてもうれしいことは何一つないから」といった「非行に対する否定的見方」を示した者が3人であった。

その他に、「働いていたからお金もあるから」非行をする必要がないといった回答や、「もう二度と少年院に行きたくないから。間違いは一回だけでいいと思っている。」、「普通に結婚して生活を送りたいから。」といった回答もあった。また、「物事に対する考え方とか、周りに対する考え方とか、前とちょっと違ってても、今の自分が一番、『じっくりきてる』じゃないけど。今は人から必要とされて、信頼されて。非行をしないのは、今の自分が好きだからだと思う。」と周囲との良好な関係や自己像の変化に言及する者や、「被害者の方に申し訳ない気持ちがあるから。」などと被害者の存在に言及する者もいた。

次に、各カテゴリーの内容について見ると、「就労・就学」では、職場の人間関係が自らの支えであるとした上で、「急に捕まったら、職場の人にも迷惑を掛けてしまう。」などと回答した者が複数いた。また、「今の店長は自分のことを信頼してくれて、仕事を任せてくれているし、そういう人たちを裏切るわけにはいかないから。」などと、就労上の自身の役割や責任について言及する者もいた。

「家族」では、「周りの人を悲しませるし、今は嫁もいるので、また捕まってしまったら、自分だけじゃないと思って。」、「やっぱり周りの支えだと思う。親とか。支えてくれている人たちを裏切るわけにはいかない。」などと、原家族、新しい家族それぞれに関する回答があった。

「非行に対する否定的見方」について、その内容を見ると、「犯罪をしても、誰も喜ばないし、そのときだけ良くて、後から谷底に落ちるような感じなので。」などと中長期的な視点からその理由について説明する者がいた。

「非行をしないでいられる理由」として、対人関係に言及した者は7人と、多くが周囲の人との関係を挙げていた。

「非行をしないでいられる理由」についての回答をまとめると、家族との関係だけでなく、職場を始めとして周囲の人との関係が立ち直りを維持する要因として言及されていた。また、価値観の変化や自己像の変容をうかがわせる回答もあった。「非行をやめようと思ったきっかけ」の回答結果と比較すると、いずれも「他者との関係」とりわけ「家族」に関する回答が多数見られた。一方、「就労・就学」を離脱のきっかけとして挙げる者は少数であったのに対し、離脱を維持する要因として挙げる者は多く、就労・就学による新たな環境やそこで得られる人間関係が離脱を維持し、強化するものとなっている様子が見える。

(3) 非行をやめようという気持ちが強くなる時

Q11

非行や犯罪をやめて良かったなと思うときや、やめようという気持ちが強くなる時がありますか。それはどんな時でしょうか。

調査対象者11人のうち、自由に行動できることのメリットを挙げるなど「自由」に関する回答をした者が3人、「特に意識していない」と回答した者が3人であった。次いで、非行や犯罪により、現在手にしている地位やこれまでの努力が無になるとして「積み上げてきたもの」の存在に言及した者は2人であった。それ以外に、「非行をやめてよかったと思うときは、罪悪感がないこと。非行をしないで仕事をやったりしていると、逆にその罪悪感が達成感や充実感になる。」「周りで悪さしている人を見ると、自分は絶対あぁなりたくないなと思う。」といった回答もあった。

次に、各カテゴリーの内容について詳しく見ると、「自由」では、「捕まってしまうと、(好きな)ロックバンドのライブにも行けなくなるので。やっぱり制限されてしまうと、嫌な気持ちになるので。」といった回答があり、過去の少年院生活等と対比して、現状の自由な生活の有難みを感じ、維持しようとする回答が複数見られた。

「特に意識していない」とした者については、「普通にやっている方が楽しいし、別にやめてよかったとは思わない。そもそもやめようという発想が出てこない。」という回答があった。

「積み上げてきたもの」については、「積み上げてきたものが(犯罪をすると)一瞬にしてパーになってしまう。」「今犯罪をやってしまうと、実名で顔も出て、社会的地位も失って、となる。」という回答があり、犯罪によりこれまでの人生で得たものを失うことへのおそれについて言及する者がいた。

「非行をやめようという気持ちが強くなる時」として、対人関係に言及した者は4人であった。その内容を詳しく見ると、「(非行や犯罪をやめることで)大事な人たちと真っ当に付き合えるし、対等な立場でお互いに付き合っている。」という回答があり、健全な対人関係を構築している現状に対し、満足している様子がうかがえる回答が見られた。

「非行をやめようという気持ちが強くなる時」についての回答をまとめると、内容にばらつきが見られたが、少年院生活と対比して、自由な生活の有難みを感じ、維持したいという考えや、現状の地位や対人関係を失いたくないという思いがうかがえた。

（4）立ち直りを邪魔するもの

Q12

少年院を出てから今日までの間、非行や犯罪をしない生活を邪魔するような出来事や、気持ちや考えが良くない方へ揺れ動くことなどがあったと思います。それはどんな時、どんな出来事で、あなたはどうやって切り抜けたか教えてください。

立ち直りを邪魔するような出来事については、非行をしていた当時の仲間に会ったとき、友人から薬物の話を持ち掛けられたとき、不良に絡まれたときなどの「不良仲間等からの誘い」について回答した者が4人であった。

また、仕事でつまずいたときといった「困難場面」に関する回答をした者と、腹が立ったときといった「感情」に関する回答をした者がそれぞれ2人であった。その他に、夜1人で出歩いているときという回答も見られた。立ち直りを邪魔するものは特になくとした者が2人いた。

次に、「立ち直りを邪魔するもの」にどのように対処したかを見ると、「不良仲間等からの誘い」を挙げた者では、「悪いことをするのは、はっきり断るようになっている。それでも誘ってくるようだったら、もう関わらない。」「（薬物の話を持ち掛けられたときに）連絡しない」ことで切り抜けたなどと、不良交友を断絶することで状況に対処したとする回答が複数見られた。「困難場面」を挙げた者では、「仕事でつまずいたとき、やっぱり何やっても無理なんだなって思ったり」したものの、「車に乗って高速行ってぶっ飛ばして、ストレス発散」するという回答があり、自分なりのストレス発散法を実践することにより、困難に直面して抱く不快感情を軽減し、その場を切り抜けようとしている者もいた。「感情」を挙げた者では、「腹立ったら、こいつ殴ってやろうかなと思うけど、もう二十（歳）になってるし、捕まるから。そう考えたら殴るのもあほらしい。」などと感情に任せて行動した場合の末路をイメージしている者もいた。その他、「ちょっとは言い返したいなというときは、今までのけんかをふっかけるような言い方じゃなくて、ちょっとイライラしてるから、言わないでくれ、みたいな。」とトラブルを避ける対人スキルを身に付けたことをうかがわせる回答があった。

「立ち直りを邪魔するもの」として、対人関係に言及した者は8人であった。

「立ち直りを邪魔するもの」についての回答をまとめると、不良交友を挙げる者が多く、不良交友の断絶が対処法として挙げられていたほか、つらいときや苛立ちを感じたときに、非行に

及ぶ危険性が高まると認識している者もあり，ストレス解消や対人スキルを活用することで切り抜けようとする者もいた。また，非行当時の交友関係から距離をとっており，立ち直りを邪魔するような出来事は現在までなかったという者もいた。

(5) 立ち直りのために我慢したこと

Q13

非行や犯罪をしない生活を続けるために、我慢したことや、犠牲にしなければいけなかったものについて教えてください。それについて、今、どう思うかについても教えてください。

調査対象者11人のうち、遊ぶ時間を削ったといった「遊興」に関する回答をした者が3人、以前の不良仲間達との交流を我慢したなどと「仲間」に関する回答をした者が1人であった。その他、「我慢したことは感情的にならないこと。むかつくことを言われても、自分の悪いところを探すようになった。ちゃんとまずは謝ることを覚えた。」「水商売をやめて、昼間の仕事にした。以前はきらびやかな世界がいいなと。」「最初は、少年院に入っていたから周りからなめられちゃだめだって、何か変なプライドがあった。今思うと、そういうものが邪魔して、なかなか変わり切れない。それが一番もったいない。せっかく自分でやろうって決めたのに、変なプライドで周りに流されてやっちゃったら、またゼロになる。」といった心掛けや対処法が挙げられた。

「(少年院を) 出てから、非行をしたいと思わなかった。」などと立ち直りのために我慢したことは特にないと回答した者が2人いた。その2人は「立ち直りを邪魔するもの」においても、特にないと回答していた。

「遊興」を挙げた者の内容について詳しく見ると、「遊ぶ時間を削ったこと。とりあえず働かないって思って。仕事に行っちゃえば、朝から晩まで帰ってこないから、遊びたくても遊べない。働いて、その分のお金稼いで、そこで頑張ったから、悪いことしなかったのかな。」「忙しくした。仕事のことをどんどん優先してやれば、そういうこと(非行や犯罪のこと)を考える暇はなくなる。」などと仕事に没頭することにより、非行や犯罪をしない生活を維持したとする回答が見られた。

「立ち直りのために我慢したこと」として、対人関係に言及した者は4人であった。

「立ち直りのために我慢したこと」についての回答をまとめると、遊びや不良交友を我慢するという者が一定数おり、仕事に打ち込むことで遊ぶ時間を作らないとした者も複数いた。また、感情的にならないようにするといった心掛けや対処法を述べる者が多く、それぞれ自分なりに非行につながる行動等を意識し、避けようとする姿勢がうかがえた。一方、過去の非行の原因は自身の精神面にあったとした上で、出院後に非行をしたい気持ちになったことはなく、特に我慢をしたこともないという者もいた。

(6) 少年院生活の受け止め

Q14

少年院で生活したことは、今のあなた自身や、あなたのこれまでの人生にとって、どのような影響があったと思いますか。少年院で生活した時間や、少年院での出来事、そこで出会った先生や他の少年など、少年院で生活したことによって、あなたが失ったものや、マイナスになったと思うことと、反対に、あなたが得たものや、プラスになったと思うことについて教えてください。

調査対象者11人のうち、全員が少年院生活によるプラスとマイナスの影響の両方について言及していたが、そのうち10人は、少年院生活は総じてプラスの経験であったとの受け止めをしており、総じてマイナスの経験であったとの受け止めをしている者は1人であった。

ア プラスの影響

少年院生活によるプラスの影響として挙げられた内容を見ると、強い意思を持てるようになった、忍耐力がついたなどと「精神面の成長」について回答した者が6人と最も多かった。次いで、資格を取得することができたなどの「資格・学習面」について回答した者が3人、担当教官等の「職員との関わり」に関する回答をした者が3人、礼儀正しい振る舞いができるようになったなどの「礼儀作法」に関する回答をした者が2人であった。また、その他、「(入院)期間が長いから、捕まることが本当に嫌になった。」、「健康な身体になった。(薬が)抜けたり、食事や生活リズム(が安定した)。』といった回答もあった。

次に、内容について詳しく見ると、「精神面の成長」では、「自分の強い意思を持てるようになった。何でも人任せにしないで、場所や状況はわかまえるけど、自分の思ったことをちゃんとと言えるようになった。」などと、少年院生活を通じて意思の強さや忍耐力が身に付いたと語る者が複数いた。また、「周りに迷惑を掛けないように生活するには、ということを考えるようになった。」などと少年院での集団生活により得た対人関係上の基本姿勢について言及する者もいた。

「資格・学習面」について、その内容を見ると、「建設機械の資格を取れたので、それが今の仕事に生きている。」、「勉強ができるし、教えてくれるから、身に付くのもあるし、資格とかも取れるから、結構役立った。」などと勉学に励むことができた環境や取得した資格について肯定

的に振り返る回答もあった。

「職員との関わり」について、その内容を見ると、「自分の問題点と向き合わせてくれたりとか、（教官の方から）答えを出さないで、自分で探させてくれたその担任の先生に感謝してる。少年院にいたときのことを、ことごとく覚えていることはできなくなってきて、でも、その先生と面接してるときのこととか、今でもたまに思い出す。」「炊場の先生から、いろいろな言葉をもらった。」などの回答があり、法務教官との関わりについて、感謝の気持ちを述べながら回答する者が複数いた。

イ マイナスの影響

少年院生活によるマイナスの影響として挙げられた内容を見ると、時間を失ったなど「時間」を挙げる者が4人と最も多かった。次いで、友人を失ってしまったなど「友人・交友関係」について言及した者が3人、家族や周囲の人々の信頼を失ったなど「周囲の信頼」について回答した者が2人であった。また、その他、「高校を辞めざるを得なくなった。」「前歴がついたこと。もう更生していても、ああやっているんだこの子、というふうに思われることが今思うとすごく重たい。」「集団生活だったので、誰か一人が何かをするとみんな同じことをしたりとか。悪いことも結構あった。」といった回答もあった。

各カテゴリーの内容について詳しく見ると、「時間」では、「14から19までの間の4年半くらいずっと施設（少年院）にいた。（少年院に）入っていなければ、もっと楽しいこともあるのに、と後悔している。」などと、少年院への入院により失った他の選択肢や機会について言及した上で、「少年院に入らなかったら、今の自分がないのは間違いない。捕まって少年院に入ったからこそ、今普通にやっていけている。」などと少年院生活の意義についても述べる者が多く、「時間」を失ったとした4人全員が、少年院生活を総じてプラスの経験であったと振り返っている。

「友人・交友関係」について、その内容を見ると、「悪いことを一緒にやっていなかった友達が、やっぱりあいつも（悪いことを）やっていたんだという感じで、出てきてから、遊びに誘っても、いや遊ばないと言われてたりした。」などと、少年院入院により、友人から疎まれるようになったと振り返る者もいた。

なお、少年院生活が総じてマイナスの影響であったとした者は、マイナスの影響として、交友関係の喪失を挙げていた。

「少年院生活の受け止め」についての回答をまとめると、全員がプラス・マイナス両方の影響

があったとしており、そのほとんどが、総じてプラスだったと受け止めていた。

プラスの影響として、精神面の成長を挙げる者が多いほか、職員との関わりに言及する者がいた。また、資格取得や勉強についてプラスになったとする者が一定数いた。

一方、マイナスの影響としては、時間を失ったとする者が多かったが、それでも、「少年院に入院していなければ、今の自分はなかった。」と少年院に入院したことを肯定的に捉えている者が多かった。また、周囲の信頼や交友関係を失ったとする者もいた。

（7） 保護観察の受け止め

Q15

保護観察を受けたことは、今のあなた自身や、あなたのこれまでの人生にとって、どのような影響があったと思いますか。保護観察官や保護司さんとのかかわりや、保護観察に関係する出来事など、保護観察を受けたことによって、あなたが失ったものや、マイナスになったと思うことと、反対に、あなたが得たものや、プラスになったと思うことについて教えてください。

調査対象者11人のうち、プラスの影響を挙げた者は8人、マイナスの影響を挙げた者は4人であった。双方の影響を挙げた者は3人で、そのいずれもが保護観察は総じてプラスの経験であったと受け止めていた。また、「特に影響を受けていない」と回答した者が2人いた。

ア プラスの影響

保護観察によるプラスの影響について言及した8人について、挙げられた内容を見ると、保護司が相談に乗ってくれた、優しく接してくれたなどと「保護司・保護観察官との関わり」に関する回答をした者が6人と最も多かった。その内容を詳しく見ると、「身近にいたので、ちょっと何かあったら電話したりしている。相談しやすい。」、「近所に知り合いみたいな感じの人ができたのがちょっとうれしかった。」などと保護司や保護観察官との関係性やその人柄を肯定的に捉えていた者が5人、親とは違う意見を聞くことができたなどと、保護司や保護観察官から受けた助言が有益であったとした者が3人であった。また、「(保護司から) 殴りたい気持ちになったりしたら電話しておいで、と言われた。けど、その中で、あんまり頼りっ放しも嫌だなんていうプライドが出てきて。じゃあ、そうしないためにはどうしたらいいか考え始めた。」と、保護司との関わりを通じた自立意識の芽生えについて述べた者もいた。

その他、「(保護観察の面接について) 2週間に1回、同じリズムであるっていうのは(生活が) 整えられるという言い過ぎですけど、ちょっとプラスになったかな。」、「保護観察の間は、やってしまうと、戻し収容とかある。そのことも心の片隅にあった。(少年院に) 戻りたくないというのもあったので、保護観察自体は良かったと思う。」といった回答もあった。

イ マイナスの影響

保護観察によるマイナスの影響について言及した4人について、挙げられた内容を見ると、「月に2, 3回(面接に)行かないといけないから、それがだるかった。」「(面接に)どうしても行かないといけないから、結構いろいろなことを断っていた。」などと「手間・時間」に関する回答をした者が3人であった。その他、保護司に対して気を遣う部分もあったと述べる者や、「ちょっと遅れたりしたら、うるさかった。仕事で残業だったのに、それでも何か、どっちが大事なの?みたいなこと言うから。」といった回答もあった。

「保護観察の受け止め」についての回答をまとめると、プラスの影響のみを挙げる者が半数以上おり、プラス・マイナス双方の影響があったとする者も含め、大半がプラスの影響であったとしていた。その多くが保護司・保護観察官との関わりについて、身近な相談相手と捉えて、その関係性を好意的に振り返っていた。一方、マイナスの影響としては、主に面接時間や手間が挙げられていた。また、影響がなかったとする者も複数いた。

「少年院生活の受け止め」と比較すると、「保護観察の受け止め」では、プラスの影響についてのみ言及した者が一定数いたほか、マイナスの影響のみに触れた者も1人いた点及び「影響を受けなかった」と回答した者がいた点が特徴的であった。「保護観察の受け止め」ではマイナスの影響について言及した者は少数であったが、「少年院生活の受け止め」では11人全員がマイナスの影響について言及していた点も異なる。また、「保護観察の受け止め」において保護観察を肯定的に受け止めていた8人はいずれも、「少年院生活の受け止め」においても少年院生活を肯定的に受け止めていた。

（8）昔の自分について

Q16

今のあなたと、非行や犯罪をしていた頃のあなたは、同じところもあれば、違うところもあると思います。どこがどんなふう違って、いつ頃、どのようなきっかけで変わってきたのかを教えてください。そして、今のあなたが、非行や犯罪をしていた頃のあなたに声をかけることができるとしたら、どんな言葉を掛けたいか、教えてください。

調査対象者11人のうち、全員が自身の肯定的な変化について回答していた。その内容を見ると、周囲への影響を考えるようになった、物事の善悪の分別がつくようになったといった「行動規範」が変わったことについて言及した者が6人と最も多く、次いで、人に対して自分の考えや意見をはっきり言えるようになったなどの「対人スキル」の獲得について回答した者が3人であった。また、その他に、「(人間関係について)今は大切だと思えるものがある。その頃(非行や犯罪をしていた頃)の自分は、みんな敵だ、ぐらいいろいだった。周りの友達の優しさに気付いていなかった。」「(今は)イライラしてる自分を反省しちゃう。あーだめだなあって思ってた。昔はそこでとまっている時間が多かったけど、最近、自分の中でいろいろ考えることもあったりとか。」という回答があった。

自身の変化の契機について7人が言及しており、その内容を見ると、「(少年院の) 厳しい寮で鍛えられて、そこで考えを変えないといけないなと思った。先生達は厳しかったけど、すごく面倒を見てくれて、いろいろ考えてくれて。その期待に応えないといけないなっていうのもあった。」「少年院の中で教わったこともあるし、外に出て頑張ろうと思った気持ちから始まった。」といった「矯正教育」を挙げた者が3人、「高校の時の友達と退院後、会ったり、遊んだりもしたので、その時に、みんな心配してくれてたっていうのを知った。」「家族から大切に思ってくれている気持ちが伝わってきた。」などの「周囲との関係」を挙げた者が3人であった。

昔の自分に掛ける言葉について見ると、11人のうち9人が回答しており、その内容について見ると、「それやっていいのかちゃんと考えろ。」「人としてどうなのって。犯罪云々の前に。」「あほやっても意味ないぞ。」「人生で誰かは関わっている、自分の生活に誰か関わっている。(非行や犯罪をすると) その人をどうしても悲しませてしまう。」「そのままいたら捕まるし、後悔することが多い。」「今は楽しいけど、楽しいのはたった一瞬だよ。」「嫌なことは嫌だっってはっきり言え。」といった、非行や犯罪を思い止まらせようとする言葉が多かったが、その他

に、「少年院でいろいろ考えたっていうのは、一人で周りから遮断されているからできるわけだし、一人旅行ってみるのもいいかもしれない。」「みんな友達だよ。仲間だよ。」という回答があった。

なお、「変わっていない点」について回答した者も2人おり、その内容を見ると、「性格は変わらない、今も昔もルーズ。」「物事に対して取り組む姿勢は変わっていないと思う。打ち込めるものに真っ直ぐ。」という回答があった。

「昔の自分について」の回答をまとめると、全員が、現在の自分は非行や犯罪をしていた頃の自分と比べて良い方向に変化したと受け止めており、その変化は矯正教育や周りの人との関係がきっかけとなったとしている者が多かった。また、昔の自分に掛ける言葉からは、非行を人としてやってはいけないもの、無意味なもの、と捉えている回答があり、価値観が変容したことがうかがえるほか、周囲への影響やてん末に目を向けさせようとするものもあった。

（9） 調査協力の理由

Q17

今まで長い間、調査に協力してくれて、ありがとうございました。時間の都合をつけるのは大変だったと思いますし、ときには、思い出したくないことを話してもらったこともあったかもしれません。そういった中で、今までこの調査に協力してもらえたのは、どんな気持ちからだったのか、最後に教えてもらえますか。この調査を通して感じたことや思ったことがあれば、あわせて聞かせてください。

調査対象者11人のうち、自分を振り返るチャンスになるなどと「振り返り」に言及した者が6人と最も多く、次いで、「(少年院を出た人の中に)普通にこうやって、何事もなく生活できている人もいるんだよということも知ってもらえればなというのもあった。」といった「他者へのメッセージ」に言及した者が3人であった。また、「自分の中で、今落ち着いてきたので、まあ行ってもいいかなって。」「ちょっと義務的な部分を感じた。ちょっとうまく説明はできない。」という回答もあった。

内容について詳しく見ると、「振り返り」では、「過去のことをもう一回思い出して、それで気持ちがちょっと強くなる。もっと頑張ろうとか、仕事つらいけど諦めないで、自分がやれるところまで上を目指して頑張っていこうとか。」「1年に1回(面接を)やらせてもらって、改めて自分の決意とかが揺らいでないんだなというのを再確認できる。」などと非行当時の自身を振り返ることを現在の糧にしようとする回答が複数あった。また、「話しながらやるというのはすごくいいことなのかなと。最初思っていたこと以外の、何か(話が)脇に逸れていろいろなことが出てくるから、自分の中でもこんなことあったなと振り返れる。」という回答もあり、振り返りの内容を言語化することのメリットや重要性について述べる者もいた。

「他者へのメッセージ」について、その内容を見ると、「自分が(少年院に)入っていた年の子どもいっぱい入っていると思うんですけど、その子どもが立ち直れるようにというのがある。」という回答があり、自身の立ち直り経験を同じような境遇にある人々の役に立たせたいとする者がいた。

「調査協力の理由」についての回答をまとめると、面接調査を通じて自身の過去を振り返り、糧にしようとする姿勢、とりわけ立ち直りの決意を新たにしようとする者が多く、自身の経験を他の非行少年の立ち直りに役立てたいといった思いを語る者もいた。

第3節 調査の結果

— 再入院群との比較から見るデシスタンス群の特徴 —

この節においては、平成26年度面接調査について、デシスタンス群と再入院群の回答内容を比較することにより、デシスタンス群に見られる特徴を検討する。

回答内容の分析に当たっては、質問ごとに、複数の調査対象者に共通して見られる回答内容をカテゴリーとして抽出した上で、そのカテゴリーに該当する内容に言及した調査対象者の数を計上している。例えば、「Q1 最高の経験」については、「家族」、「友人・知人」、「達成・スポーツ」、「就労・就学」、「非行等」のカテゴリーが抽出され、「高校に合格して家族に祝福された」というエピソードを語った者は、「家族」と「就労・就学」の二つのカテゴリーに計上されている。

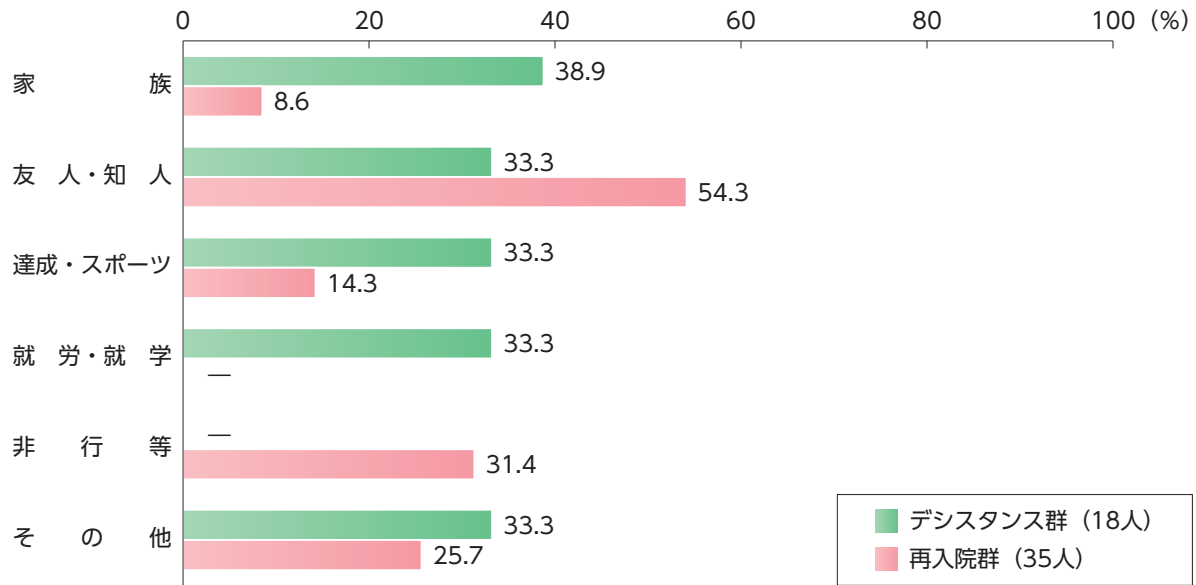
カテゴリーの抽出は、3人の研究担当者が回答内容を読み込んだ上で独立して行い、その結果を踏まえて協議した結果、適切と考えられるものを選定した。計上作業は、選定されたカテゴリーを用いて、研究担当者3人が独立して行い、3人の計上結果が一致しない場合は協議した上で、最終的に研究担当者3人が一致した結果を計上している。

なお、回答内容は、面接者の質問に対して調査対象者が自由に回答した結果であるため、ある経験が語られていない場合でも、そのような経験がないとは解釈できない点に留意する必要がある。また、デシスタンス群に対しては、社会内で本調査を行っている一方で、再入院群に対しては、少年院に再入院している間に本調査を行っており、現に矯正教育を受けていることや、在院者という特殊な立場にあることが、回答内容に影響している可能性がある点にも留意する必要がある。

1 最高の経験

5-3-1図は、最高の経験の回答について、各カテゴリーに言及した者の比率をデシスタンス群・再入院群別に見たものである。

5-3-1図 最高の経験（デシスタンス群・再入院群別）



注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 回答の中で各カテゴリーに言及した者の比率を示している（重複計上による。）。

デシスタンス群では、最高の経験として、「家族」、「友人・知人」、「達成・スポーツ」、「就労・就学」に関して言及した者が多く、それぞれ約3割から4割の者がこれらの項目を挙げていた。一方、再入院群を見ると、「家族」及び「達成・スポーツ」に言及した者は約1割であり、デシスタンス群より少なかったが、「友人・知人」については、デシスタンス群よりも多く、半数以上の者が言及していた。また、「就労・就学」に言及した者はいなかった。

回答の内容について詳しく見ると、「家族」は、デシスタンス群、再入院群共に、家族との関係性における肯定的な出来事を挙げている者が多かった。ただし、デシスタンス群では、配偶者や子（「新しい家族」という。以下、この節において同じ。）の誕生の話題などを取り上げた者が複数人いたのに対し、再入院群では自身が生まれ育った家族（「原家族」という。以下、この節において同じ。）に関する話題を挙げていた。

「友人・知人」については、デシスタンス群、再入院群共に、友人と遊びに出掛けたことなどの肯定的な出来事について触れる者が多かったが、再入院群では、「友達と悪いことしてるときとか、何か楽しかったりした。」、「音楽を爆音で流して、みんなで酒とかたばことか、マリファナとか吸ってみんなで騒ぎまくった。」など、非行や反社会的行動と関連して語る者が、「友人・知人」に言及した19人中6人（31.6%）いた。その他、仲間と飲酒しながら盛り上がったことなど、友人と過ごした享乐的な場面について挙げる者が、デシスタンス群で6人中1人、再入

院群で19人中4人いた。なお、「友人・知人」のうち、「交際相手」に関して言及した者は、デシスタンス群ではいなかったが、再入院群では8人おり、交際相手ができたとや、交際相手と遊びに出掛けたことなどに触れていた。

「達成・スポーツ」については、デシスタンス群、再入院群共に、スポーツでの勝利経験や受験の合格経験などを通じて、達成感を得たことを挙げている者が多く、両群間で、内容面に大きな違いは見られなかった。

次に、「就労・就学」は、デシスタンス群で就労に関して述べた者が2人(11.1%)、就学に関して述べた者が4人(22.2%)いたが、再入院群では「就労・就学」について言及した者はいなかった。内容を見ると、デシスタンス群では、高校受験に合格したことや、仕事でボーナスをもらったことなど、学校や仕事にまつわる出来事を達成経験と共に語っている者が多かった。

さらに、デシスタンス群では、最高の経験として、「非行等(非行・問題行動)」に言及する者はいなかったが、再入院群では約3割の者が、暴走してスリルを感じたこと、薬物を使用したこと、詐欺を実行して大金が手に入ったことなど、「非行等」に及んだことを最高の経験として挙げている。特に、「(暴走族の集会に初めて参加したことについて) 地元での暴走族は何か絶対的存在っていうか、暴走族がてっぺんみたいな感じだった。これで俺も這い上がれるみたいな気持ちもあって、楽しかった。」、「(自分が改造したバイクが雑誌に掲載されたことについて) 他の人に(自分のバイクを) 見てもらえるっていうのが、ちょっとうれしかった。」など、非行や反社会的行動を通じて、他者に認められたり、達成感を得たりした経験を語っている者がその半数近くであった。

その他、再入院群の中には、小学生の頃に両親から虐待されていたが、児童相談所に保護され、助け出されたことを挙げた者がいた。

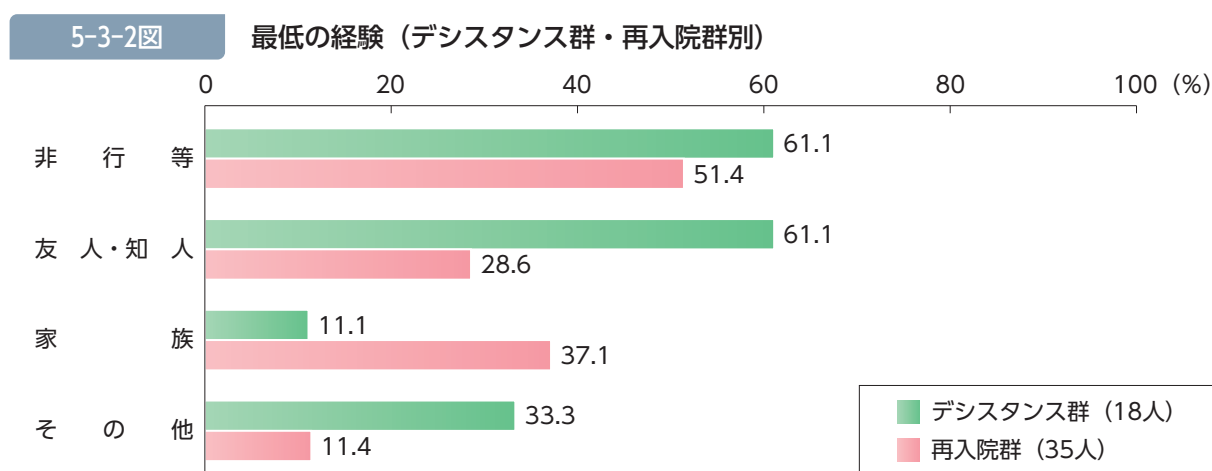
それぞれのエピソードを通じて、「友人・知人」や「家族」等、対人関係に関連した出来事を最高の経験として語った者は、デシスタンス群では13人(72.2%)、再入院群では23人(65.7%)であり、大きな差は見られなかった。

なお、最高の経験として語られた出来事の時期に注目すると、小学校6年生までの出来事を挙げている者は、デシスタンス群で3人(16.7%)、再入院群で7人(20.0%)と、大きな差は見られなかったが、再入院群の中には、まだ非行に及んでおらず、家庭環境や友人との関係が安定していた幼い頃が一番幸せであったと語った者がいた。一方、前回少年院を出院した後の出来事について挙げている者は、デシスタンス群で11人(61.1%)、再入院群で14人(40.0%)

であり、デシスタンス群の方に多く見られた。そのうち、スポーツでの活躍や高校合格等、何らかの達成経験を挙げた者は、デシスタンス群で11人中4人（36.4%）、再入院群では15人中1人（6.7%）であった。

2 最低の経験

5-3-2図は、最低の経験の回答について、各カテゴリーに言及した者の比率をデシスタンス群・再入院群別に見たものである。



注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 回答の中で各カテゴリーに言及した者の比率を示している（重複計上による。）。

デシスタンス群では、最低の経験として、「非行等（非行・問題行動やそれによる一連の法的措置に関すること）」及び「友人・知人」に関して言及した者が約6割おり、続いて、「家族」を挙げた者が約1割いた。再入院群では、「非行等」について挙げた者が約5割いたが、「友人・知人」に関する言及があった者は約3割でデシスタンス群よりも少なく、逆に「家族」に関する言及は約4割とデシスタンス群よりも多かった。

「非行等」について、その内容を詳しく見ると、「（非行をしていた当時は）自分よければ全てよしみたいな感じ」で「客観的に見たら、結構最悪な人間。」「（事件を起こし、少年院に入ったことで）親を裏切ってしまった、親不孝をしてしまったっていうのが、やっぱり一番自分の中でつらかった。」など、自分自身の行為に対する悔悟の念や、周囲の人間及びその後の自分自身に与えた影響等についても言及している者は、デシスタンス群で11人中7人（63.6%）、再入院群で18人中5人（27.8%）であり、デシスタンス群の方が再入院群よりも多かった。一方、

再入院群の回答を見ると、審判で少年院送致になり家に帰れなかったことが最悪だと思ったなど、逮捕や少年院送致といった出来事そのものへの言及のみで、周囲への影響等には触れていない者が散見された。

次に、「友人・知人」については、デシスタンス群と再入院群で、それぞれ、周囲からいじめられたことなどの被害体験や、友人を非行に巻き込んでしまったことなど自身の行動に起因する出来事が挙げられており、その内容に大きな差は見られなかった。ただし、デシスタンス群では交際相手について述べた者はいなかったが、再入院群では3人おり、交際相手の浮気が発覚し自尊心が傷付けられたことなどが挙げられていた。

「家族」に言及した者について詳しく見ると、デシスタンス群が、非行によって親不幸をしたことなどを挙げているのに対し、再入院群では、父親から虐待され児童相談所に入所したことや、家族からの虐待や親の自殺等、「家族」に関する話題の中でも、家庭内での逆境的な経験についての話題を挙げている者が13人中9人（69.2%）と約7割を占めていた。

その他としては、天災や心身の病気、バイク事故などを挙げた者がいた。

それぞれのエピソードを通して、対人関係に関連した出来事を最低の経験として語った者は、デシスタンス群では13人（72.2%）、再入院群では22人（62.9%）であった。

また、最低の経験について、大きく、いじめられたことや、親が自殺したことなど、外的環境に起因する経験と、友人を非行に巻き込んでしまったこと、母親に手を上げてしまったことといった自らの行動等に起因する経験に分けると（双方に言及している場合は、双方に計上している。）、外的環境に起因する経験を語った者は、デシスタンス群では10人（55.6%）、再入院群では29人（82.9%）、自らの行動等に起因する経験を語った者は、デシスタンス群では7人（38.9%）、再入院群では10人（28.6%）であり、デシスタンス群は再入院群と比べて、外的環境に起因する経験を語る者の割合が少なかった。

なお、最低の経験として語られた出来事の時期に注目すると、小学校6年生までの出来事を挙げていた者は、デシスタンス群で1人（5.6%）、再入院群で8人（22.9%）であり、再入院群に多く見られた。再入院群で小学校6年生までの出来事を挙げた8人のうち5人が、被虐待や親の死等、家族との関係で体験した逆境的な経験に言及していた。一方、前回少年院を出院した後の出来事（ただし、再入院群については、今回の非行やそれに関連する逮捕、少年院送致等は除く。）について挙げていた者は、デシスタンス群で2人（11.1%）、再入院群で5人（14.3%）であり、大きな差は見られなかった。再入院群で、前回少年院を出院した後の出来事について挙げた者の中には、交際相手にまつわるエピソード（交際相手に浮気された、少年院

で出会った先輩に交際相手を取られたなど。)を述べた者が3人いたほか、母親の自殺といった家庭内の逆境的な経験を挙げた者もいた。

3 転換点

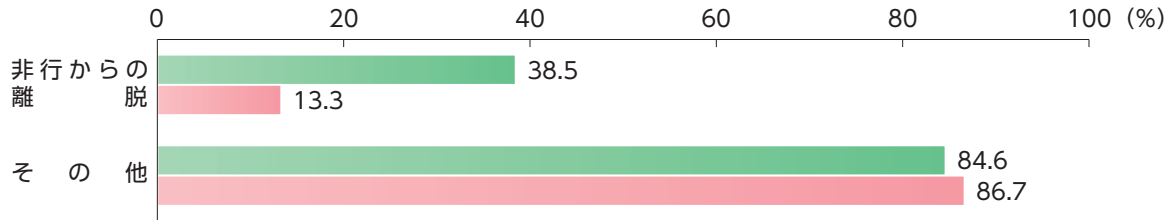
転換点について、人生が好転した契機（良い転換）について語った者と、悪化した契機（悪い転換）について語った者に分けると、デシスタンス群では、良い転換について語った者が13人（72.2%）、悪い転換について語った者が8人（44.4%）であったのに対し、再入院群では前者が15人（42.9%）、後者が22人（62.9%）であり、デシスタンス群では、悪い転換よりも良い転換について語る者が多く、逆に再入院群では良い転換よりも悪い転換について語る者が多かった。また、再入院群では、人生において転換点となった出来事は特にないと答えた者が1人いた。

5-3-3図は、転換点の回答について、良い転換と悪い転換のそれぞれにつき、各カテゴリーに言及した者の比率をデシスタンス群・再入院群別に見たものである。

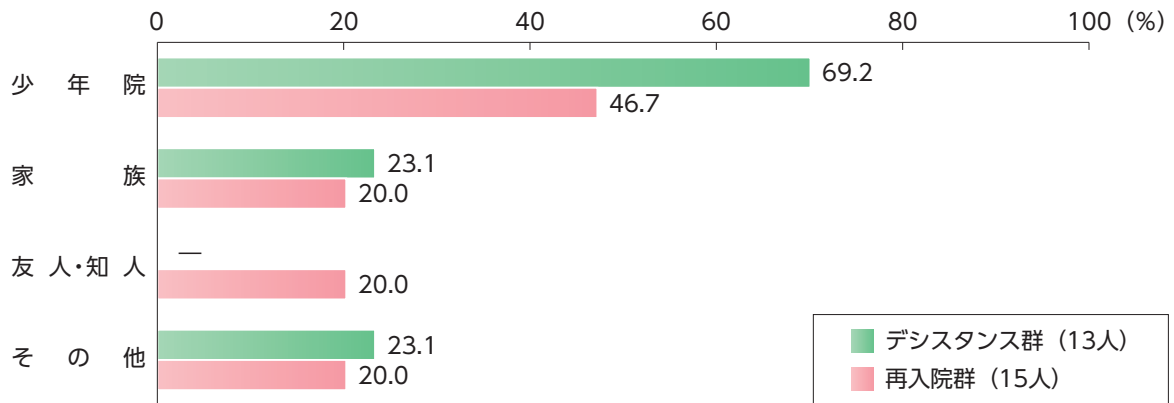
5-3-3図 転換点（デシスタンス群・再入院群別）

① 良い転換

ア 内容

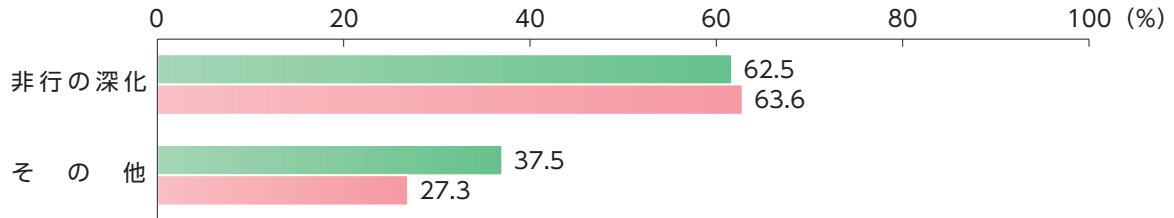


イ きっかけ

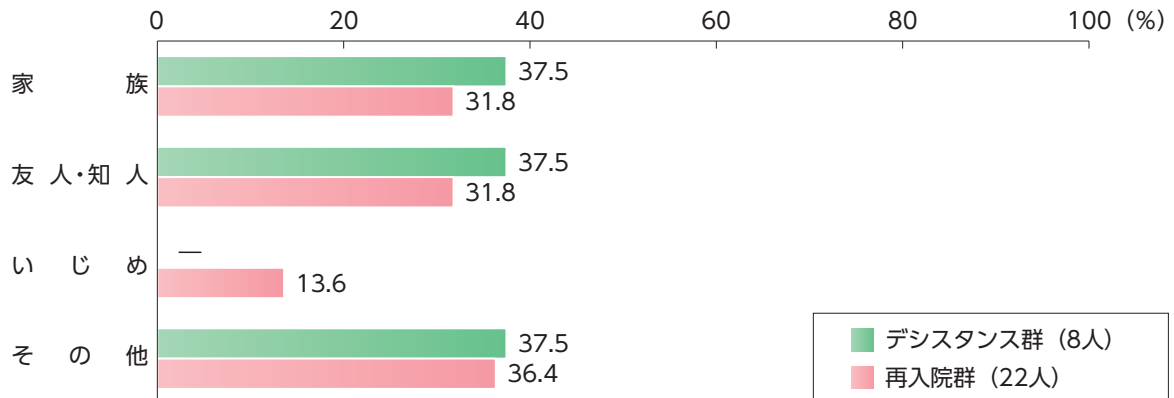


② 悪い転換

ア 内容



イ きっかけ



注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 回答の中で各カテゴリーに言及した者の比率を示している（重複計上による。）。

（1） 良い転換

人生が好転した契機（良い転換）について語った者について、そのエピソードの内容を見ると、「非行からの離脱」について語った者は、デシスタンス群では約4割、再入院群では約1割であり、デシスタンス群の方が多かった。なお、再入院群の該当者には、小学生の頃、不良仲間との付き合いをやめたことで真面目に生活するようになったことなど、非行から離脱していた頃の過去の経験について語っている者がいた。「非行からの離脱」以外のエピソードでは、「目の前のことだけじゃなくて、先のことに目を向けるっていうことを覚えた。」など、社会生活に必要な能力や態度が身に付いたことについて述べる者が、デシスタンス群で11人中4人（36.4%）であり、再入院群（13人中3人、23.1%）よりもやや高い割合であった。

人生が好転したきっかけを見ると、デシスタンス群では、「少年院」を挙げた者が約7割で最も多く、続いて「家族」に言及した者が約2割であった。一方、再入院群では、「家族」を挙げた者の割合はデシスタンス群と大きく変わらなかったが、「少年院」は約5割でデシスタンス群よりも低く、一方で、デシスタンス群では見られなかった「友人・知人」について挙げる者が2割いた。

「少年院」については、「我慢を覚えた。人に暴力を振るうことが、本当にいけないなって思えた。」「責任感とか忍耐力とかそういうものを身に付けて、社会に戻ったとき仕事を頑張れるようになった。」など、少年院において社会性が育まれたとするものが大半であり、デシスタンス群と再入院群の間で内容に大きな違いは見られなかった。中には、「このまま捕まっていなかったら、多分もっとひどいことになってた。」として、少年院送致となって良かったと述べる者も双方の群に見られた。また、「担任の先生が自分以上に自分のことを真剣に考えてくれて、自分のためにいろいろしてくれたんで、本人の自分がしっかりやらなければって思えた。」など、少年院の職員に触れていた者は、デシスタンス群で9人中6人（66.7%）、再入院群で7人中5人（71.4%）であった。

「家族」については、家族との関係の改善や、親の有り難みを感じたことなどが契機として挙げられており、デシスタンス群では、子の誕生により、非行をやめて真面目に生活するようになったと語る者もいた。

「友人・知人」について語った者は、再入院群で3人おり、交際相手と別れたことや不良交友をやめたことをきっかけに、真面目に生活するようになったことなどを語った。

その他には、逮捕されたことが、自身の行動を振り返るきっかけとなったとする者や、仕事を始め、仕事仲間を裏切れないと思ったことで、生活態度を改める必要を感じるようになった

と述べる者などがいた。

なお、「良い転換」のエピソードを、契機となった出来事を経験した時期別に見ると、小学校6年生までの出来事を挙げていた者は、デシスタンス群ではいなかったが、再入院群では15人中3人(20.0%)いた。一方、前回少年院を出院した後の出来事(ただし、再入院群については、今回の非行やそれに関連する逮捕、少年院送致等は除く。)について挙げていた者は、デシスタンス群で13人中3人(23.1%)、再入院群で15人中4人(26.7%)であった。内容を見ると、双方の群において、前回少年院を出院してから仕事を始め、仕事中心の生活になったことや、家族との関係が好転し、新たに更生への決意を固めたことなどが語られていた。

(2) 悪い転換

人生が悪化した契機(悪い転換)について語った者について、そのエピソードの内容を見ると、自身が非行に至るようになった経緯など、「非行の深化」について挙げていた者が多く、デシスタンス群、再入院群で共に約6割であった。「非行の深化」以外のエピソードでは、「(母が死んだ後)父は帰って来なくなり、姉ちゃんは家で非行仲間と騒ぐようになった」結果、家族がばらばらになってしまったことや、「(家族からからかわれて、家に居場所がなくなったために)友達に依存して、遊びまわることになった」ことなど、家庭の環境の悪化や生活の崩れについて述べられることが多かった。

人生が悪化したきっかけを見ると、「家族」、「友人・知人」に言及した者が、デシスタンス群でそれぞれ約4割ずつ、再入院群でそれぞれ約3割ずつであった。

「家族」については、家族による虐待や、親との離死別等の家庭内における否定的な出来事について語られていることが多かった。また、「友人・知人」について言及した者はいずれも、不良交友の影響により生活が乱れたといったエピソードを語っており、デシスタンス群と再入院群に大きな違いはなかった。

「いじめ」について言及した者は、デシスタンス群には見られなかったものの、再入院群では、「いじめがあって、それから人をものすごく見下すようになったっていうか、信じられなくなった。」など、対人不信感が芽生えたことを述べた者がいた。

その他、スポーツや部活をやめたことが、非行に至るきっかけとなったと述べた者が、再入院群で3人いた。

また、再入院群では、「強盗をやってしまってから、ほかのことがレベルが低く感じてしまうっていうか、それをきっかけに毎日悪いことばっかしてた。」「気付いたら殴ってて、そこからけ

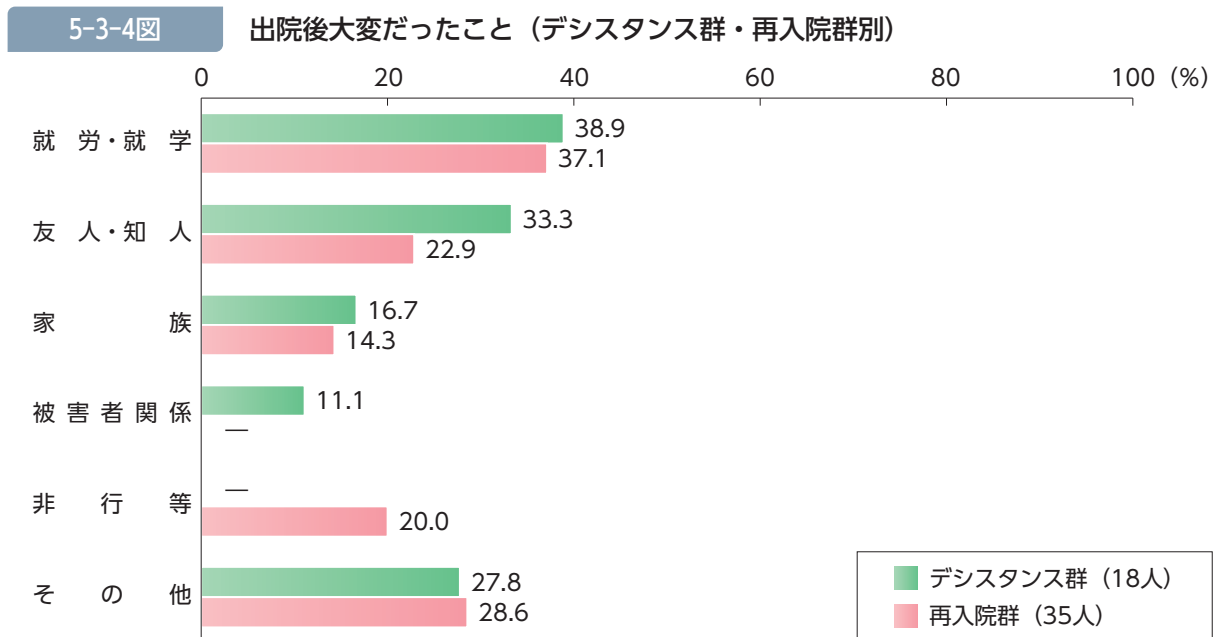
んかの味を覚えてけんかが好きになった。」など、初期の非行及び問題行動がきっかけとなって、非行が深化する様子を語る者もいた。

なお、再入院群には、「少年院」を人生の悪化のきっかけとして挙げ、規律違反を起こしたことに対する処遇が不満でさらに規律違反を繰り返し、職員への不満や不信感が募って大人が信用できなくなったと語る者が1人いた。

「悪い転換」のエピソードを、契機となった出来事を経験した時期別に見ると、小学校6年生までの出来事を挙げていた者は、デシスタンス群で8人中1人（12.5%）、再入院群で22人中10人（45.5%）と、再入院群に多く見られた。なお、再入院群の10人のうち5人は、被虐待や親との離死別等、家族との関係の中で体験した逆境的な経験に言及した。一方、前回少年院を出院した後の出来事（ただし、再入院群については、今回の非行やそれに関連する逮捕、少年院送致等は除く。）について挙げた者は、デシスタンス群で8人中1人（12.5%）、再入院群で22人中2人（9.1%）であった。

4 出院後大変だったこと

5-3-4図は、出院後大変だったことの回答について、各カテゴリーに言及した者の比率をデシスタンス群・再入院群別に見たものである。



注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 回答の中で各カテゴリーに言及した者の比率を示している（重複計上による。）。

デシスタンス群では、「就労・就学」、「友人・知人」、「家族」にまつわる出来事について困難を感じていたと述べる者がそれぞれ約2割から4割おり、再入院群についてもこれらのカテゴリーに言及した者が多かった。

内容ごとに詳細に見ると、「就労・就学」では、就労について述べた者が、デシスタンス群で5人(27.8%)、再入院群で10人(28.6%)、就学について述べた者が、デシスタンス群で2人(11.1%)、再入院群で3人(8.6%)であった。就労について述べた者を見ると、再入院群では、仕事をする事自体にやりがいを感じられない、怠けたい気持ちがありすぐ辞めたくなくなってしまったといった、意欲面での困難さについて挙げた者がいたが、デシスタンス群ではそのような回答はなく、仕事を掛け持ちして忙しかったこと、残業が多いことなどについてであった。理不尽なことを言われて嫌な気持ちになったなど、職場の人間関係を挙げた者は双方の群に見られた。また、仕事に関連して前歴の影響について言及した者も両群に1人ずつおり、デシスタンス群では、少年院入院歴があることを同僚の1人に話したところ全員に伝わってしまい、その同僚と距離を置いたという回答、再入院群では、前歴があり、親の協力も得られない中で仕事を探すことが大変だったという回答があった。一方、就学については、全体的に受験勉強の困難さについて述べる者が多かったが、再入院群では、「学校行ったりすんのが面倒くさくて、仕事したいなって思った。」と、学校生活自体の困難さを語った者がいた。

「友人・知人」では、デシスタンス群、再入院群の双方において、仲間とのトラブルや付き合い方に困難を感じたエピソードを挙げる者がおり、その内容に大きな違いは見られなかった。なお、交際相手について述べた者は、デシスタンス群ではいなかったが、再入院群では2人いた。

「家族」については、家族との関係の悪さや、家族との離死別等にまつわる体験など、デシスタンス群と再入院群で共通する内容が語られたが、デシスタンス群では、親との不仲について、「いっぱいいっぱいになったときは、保護司さんとか友達とか彼氏とかに話して聞いてもらって、それだけでも大分気持ちが楽になった。」など、それにどう対処したかを含めて語る者が多かったのに対し、再入院群ではそうした回答はなかった。

また、デシスタンス群では、「被害者関係(被害者への謝罪や賠償)」について2人が言及したが、再入院群では、そのような回答は見られなかった。

その他、デシスタンス群では見られなかったが、再入院群では、「4回再逮捕されて、鑑別所に行ったり戻ったりしたのが、一番大変だった。」など、自身の非行や問題行動にまつわる出来事について語った者が2割おり、うち1人は、薬物乱用がやめられなかったという、非行から

離脱すること自体の難しさを語って、「1週間くらいやめる努力はしたけど、兄弟分がやってるのが分かって、それから自分もまたやっちゃった。」と述べた。また、再入院群では、「もう犯罪はしないって考えてたけど、いざ（少年院を）出ると結構自由になるんで、気の緩みが出てきて、もうどうでもいいやとなってしまう。」「理想は、もう犯罪とかしないで、堅実な生き方して仕事もしっかりして、でも現実には解放感で遊びまくりたくなってしまう。」など、非行から離脱するための意思を持ち続けることや、自分の問題性をコントロールすることについて大変だったと語った者が3人いた。

特に大変だということにはなかったと述べた者は、デシスタンス群で2人、再入院群で1人いた。

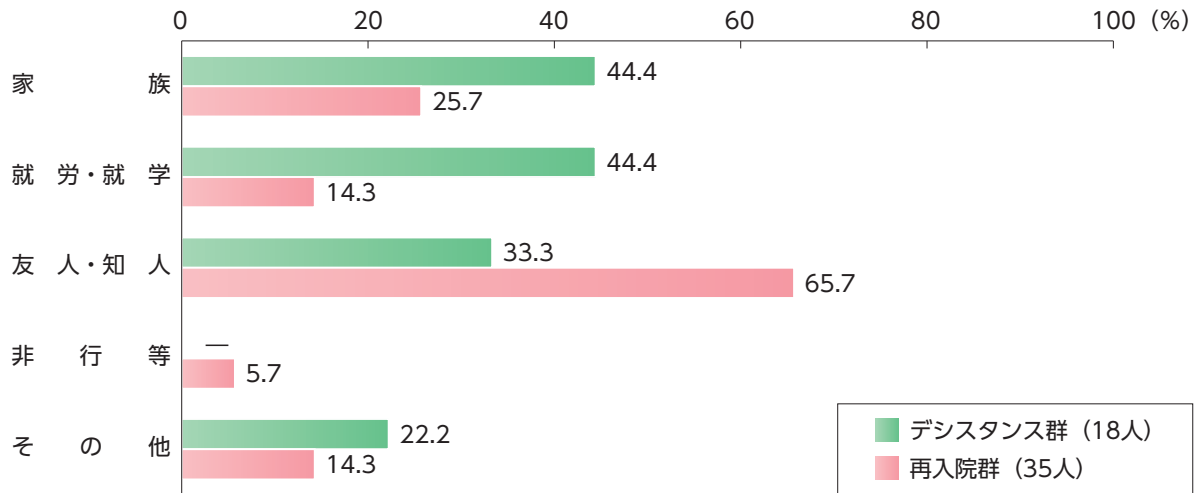
それぞれのエピソードを通して、対人関係の困難さについて語った者は、デシスタンス群では10人（55.6%）、再入院群では16人（45.7%）であり、それぞれ一定の割合を占めていた。

また、大変だったことについて、「（受験勉強に苦労したが）努力できたことは、これからも経験というか自信につながるかもしれないと思う。」など、困難はあったが、解決に向けて何らかの対処をしたとか、自分にとって意味のある経験であったなど前向きあるいは肯定的なエピソードとして語った者が、デシスタンス群では12人（66.7%）おり、再入院群の10人（28.6%）と比べて目立った。対して、再入院群では、「（父親が入院したため、自分が家族の面倒を見る必要があったが）自分には負担に感じて、まだ遊びたいとかそういうのがあったから、結局逃げる方ばかりだった。」「（仕事に）慣れてくるとやりがいとか感じられないっていうか、惰性でやったり、苦手な作業とかあればやりたくなかったりとか、仕事が長続きしない方なので続けていくのが大変だった。」など、困難への対処方法については余り語らず、自分ではどうすることもできず解決に至らなかったとした者が目立った。

5 出院後うれしかったこと

5-3-5図は、出院後うれしかったことの回答について、各カテゴリーに言及した者の比率をデシスタンス群・再入院群別に見たものである。

5-3-5図 出院後うれしかったこと (デシスタンス群・再入院群別)



注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 回答の中で各カテゴリーに言及した者の比率を示している (重複計上による。)

デシスタンス群では、出院後うれしかったこととして、「家族」、「就労・就学」、「友人・知人」に関連した出来事に言及した者が多く、それぞれ約3割から4割の者がこれらの項目を挙げていた。一方、再入院群を見ると、「友人・知人」について挙げた者が約7割と、デシスタンス群よりも顕著に多かったが、「家族」及び「就労・就学」については、それぞれデシスタンス群よりも少なかった。

「家族」について、デシスタンス群では、家族に言及した8人のうち4人が子の誕生や配偶者の存在など新しい家族について述べていたが、再入院群では、家族に言及した9人全員が父母との思い出など原家族のことについて語っていた。なお、新しい家族について語ったデシスタンス群の4人は、「結婚するなら、もう責任持って最後まで一緒にいてやらなきゃいけないと思って。自分がいなくなったら、生活費とかどうなるかなとか思いだしたら、これはもう悪さはやめないといけないなと思った。」など、いずれも新しい家族の存在が非行からの離脱や生活態度を改めることにつながっていると語った。また、再入院群では、「逮捕されてから、家族にしても今まで関わってきた大人の人にしても、自分のことを心配してくれて、面会に来てくれたり手紙出してくれたり、これだけのことをしても自分のことをまだ見捨てないで思ってくれてるっていうのはうれしかった。」など、家族の自分への思いを実感し、感謝の念を覚えた旨について語った者が複数人いた。

「就労・就学」では、就労について述べた者が、デシスタンス群で7人 (38.9%)、再入院群で2人 (5.7%)、就学について述べた者が、デシスタンス群で1人 (5.6%)、再入院群で3人

(8.6%)であった。就労について述べた者を見ると、デシスタンス群では、就職が決まったことや、仕事から充実感や達成感を得たことなどについて語った者が多かったが、再入院群は、いずれも給料で好きなものが買えたことについて言及した。就学については、両群において、受験に合格したことや、学校生活の楽しさなどが共通して挙げられていた。

「友人・知人」については、双方の群において、友人ができたことや、友人と一緒に遊びに出掛けたことなどが多く挙がっていた。また、再入院群では、自分が悪いことをしようとしたときに、友人が止めてくれたことなど、友人や知人の存在が再非行への歯止めになったと述べる者が4人いた。なお、交際相手に関して述べた者は、デシスタンス群では2人(11.1%)であったのに対し、再入院群では12人(34.3%)であり、再入院群の方に多く見られ、交際相手と婚約したことや、自分の出院を交際相手が待っていてくれたことなどが挙げられていた。

なお、デシスタンス群にはいなかったものの、再入院群では、「(出院後に入所していた施設を抜け出して)知らない土地をうろちょろしながら薬を使ったのが一番うれしかった。」など、「非行等(非行・問題行動)」に及んだことを出院後のうれしかった経験として挙げる者が2人いた。

その他、スポーツでの活躍や免許・資格取得など何らかの物事を達成した経験について述べる者や、少年院を出院したときに見た社会の光景に感動したという者が、双方の群において見られた。

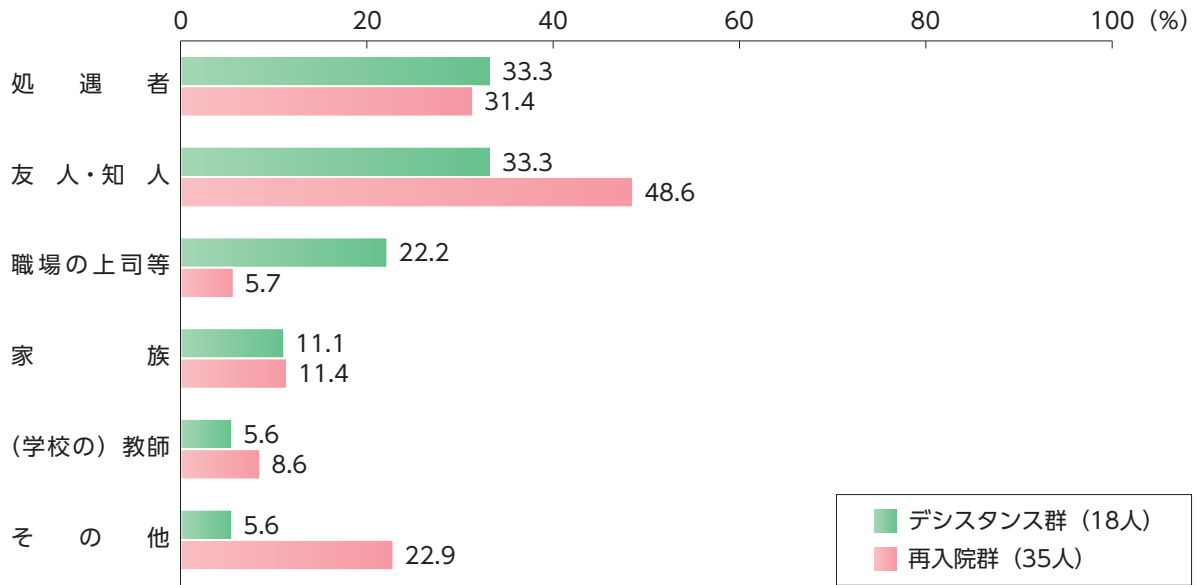
なお、対人関係に関連した出来事について語った者は、デシスタンス群では14人(77.8%)、再入院群では28人(80.0%)といずれも大半を占めた。

6 影響を与えた出会い

5-3-6図は、影響を与えた出会いの回答について、各カテゴリーに言及した者の比率をデシスタンス群・再入院群別に見たものである。

5-3-6図

影響を与えた出会い（デシスタンス群・再入院群別）



注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 回答の中で各カテゴリーに言及した者の比率を示している（重複計上による。）。

デシスタンス群では、法務教官や保護司などの「処遇者」や、「友人・知人」、「職場の上司等（上司・先輩・同僚）」を挙げた者がそれぞれ約2～3割いた。再入院群では、「処遇者」について挙げた者の割合は約3割でデシスタンス群と同程度であったが、「友人・知人」について挙げた者の割合は約5割とデシスタンス群よりもやや多く、逆に「職場の上司等」は1割に満たずデシスタンス群よりも少なかった。

「処遇者」の内容について見ると、デシスタンス群では、「法務教官」が3人（16.7%）、「保護司」が3人（16.7%）、再入院群では、「法務教官」が8人（22.9%）、「保護司」が2人（5.7%）、「家庭裁判所調査官」が1人（2.9%）いた。デシスタンス群、再入院群共に、「出院まで、ずっといろいろ話を聞いてくれたり、アドバイスをくれたりして、その先生たちに出会えたから多分頑張れたんじゃないか。」、「自分のためにここまでやってくれる人がいるんだなって。期待してくれてるから、応えられるまではしようかなって（思った）。」など、処遇者から与えられたアドバイスや受容的な関わり等について言及し、精神的な支えになったなどと述べる者が多く、デシスタンス群と再入院群の間に、内容面での大きな違いは見られなかった。また、双方の群で、「上からの物言いじゃなくて、同じ目線で言ってもらえる。」、「プライベートの話とかもできて、固くない。」など、自分と同じ立場から関わってもらえたという、親密さや距離の近さを感じさせるような法務教官の姿勢に好感を抱いている様子が見られた。

「友人・知人」については、双方の群において、「(先輩について) 自分が困ったら、いろいろ助けてくれた。自分も後輩とかに対して、そういう心の広い先輩になりたいなと思った。」など、見習いたいと感じた身近なモデル的な存在や、非行からの立ち直りに向けて、肯定的な変化をもたらした存在が挙げられることが多かった。なお、交際相手について言及した者は、デシスタンス群（1人、5.6%）よりも再入院群（6人、17.1%）に多く、再入院群では、自分のことを理解してくれる交際相手のおかげで薬物乱用の回数が減ったなど、その存在が非行からの離脱につながったと述べる者がいた。また、再入院群の1人は、以前自分と同じように非行に及んでいた先輩が、現在は更生して仕事に邁進している様子に影響を受けたと言い、「俺は何してるんだろう、俺も頑張らなきゃ、俺もあんな感じになりたいと感じた。」と、自身の生活を見直すきっかけになったと述べた。

「職場の上司等」について挙げた者は、デシスタンス群に一定数おり、社会人として尊敬でき、自分もそうなりたいと思ったというように、社会内における健全な大人のモデルとして捉えている様子が見えられた。再入院群でも、人数は少なかったものの、親身になってくれた、信頼できる人なので付いていこうと思ったなど、信頼感を寄せている様子が語られていた。

「家族」については、デシスタンス群の2人はいずれも家族の存在が非行からの離脱につながっていると述べたが、再入院群では、大切な存在であるという趣旨で挙げている者が目立った。

「(学校の) 教師」については、親身になってくれた、見捨てずにいてくれた等、自分の存在を肯定し、受け入れてくれたことについて語られることが多く、「処遇者」と共通する内容であった。

その他、付添人の弁護士を挙げた者が、デシスタンス群で1人、再入院群で2人おり、「(自分の発言を) 全部ひっくり返されちゃって、自分のこれまでの考え方が、余りにも狭い中で閉じこもってたなって思って、そういう意味では、自分はまだまだだになっていうか、自分がどれだけうぬぼれてたかっていうのを気付かされた。」などという回答があった。

一方、デシスタンス群ではいなかったものの、再入院群では、「暴力団関係者」を挙げた者が2人おり、それぞれ、暴力団関係者と関係を持つことは良いことではないと言及しつつ、「(金銭の回収などを頼まれて) 自分も人に頼られるんだ、一人じゃないんだみたいなイメージができて、自分もこういうところで役立つんだみたいな気持ちになった。」などと、肯定的な影響をもたらしたものと受け止めていた。

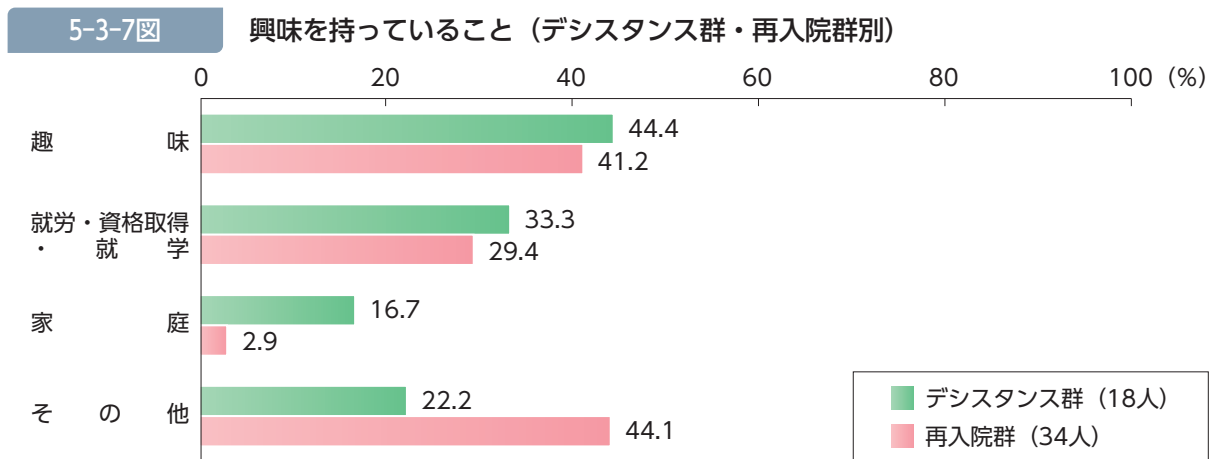
なお、特に影響を与えた出会いはなかったと答えた者は、再入院群で2人いた。

デシスタンス群も再入院群も、何らかの影響を与えた出会いがあったと回答した者のうち全

員が、自身に良い影響を与えた出会いについて言及しており、健全な大人のモデルとなる人物や、自分に関心を寄せ、受容的に受け止めてくれたり精神的に支えてくれたりした人物について語るが多かった。中でも、法務教官や保護司などの「処遇者」を始めとして、一連の法的措置の中で関わった人物との出会いについて語る者が目立った。なお、デシスタンス群の1人は、高校の同級生を通じて、不良交友が広がってしまったことを悪い影響を与えた出会いとして挙げ、その後、更生のきっかけとなった交際相手との出会いについて語ったが、再入院群では悪い影響を与えた出会いについて語った者はいなかった。

7 興味を持っていること

5-3-7図は、興味を持っていることの回答について、各カテゴリーに言及した者の比率をデシスタンス群・再入院群別に見たものである。



注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 回答の中で各カテゴリーに言及した者の比率を示している (重複計上による。)

デシスタンス群では、「趣味」を挙げる者が約4割と最も多く、続いて、「就労・資格取得・就学」が約3割、「家庭」が約2割であった。一方、再入院群でも、「趣味」を挙げた者が約4割で最も多く、続いて「就労・資格取得・就学」を挙げた者が約3割であったが、「家庭」を挙げた者は1割に満たず、デシスタンス群と比べて少なかった。

「趣味」の内容を具体的に見ると、音楽、スポーツ、アニメ鑑賞、釣り、料理などが挙げられた。こういった趣味について、ストレス解消や嫌なことを忘れられると述べた者は、デシスタンス群で8人中3人(37.5%)、再入院群では14人中2人(14.3%)であった。また、車・バイ

クへの興味を語った者は、デシスタンス群で8人中2人（25.0%）、再入院群で14人中6人（42.9%）おり、中でも車やバイクの改造に関心を持つ者がデシスタンス群で1人、再入院群で4人と一定数見られた。

次に、「就労・資格取得・就学」は、就労・資格取得について述べた者が、デシスタンス群で5人（27.8%）、再入院群で9人（26.5%）、就学について述べた者が、デシスタンス群で2人（11.1%）、再入院群で1人（2.9%）であった（双方に言及している場合は、双方に計上している。）。就労・資格取得について述べた者を見ると、トリマーや大工など、具体的になりたい職業を挙げる者もいれば、出院後どのような仕事をするかに興味があるといった抽象的な回答もあった。デシスタンス群では、警察官や法務教官等、保安系の職業への興味を語る者もいたが、再入院群では、「役者、俳優やってみたいなって思ってる。ただ、テレビに出たいなって。」「長者番付の1位取ってるっていう夢があって、自分の計算だとFXで5年か6年で100億円以上稼げる。」など、やや現実離れした夢を語る者が多かった。就学については、双方の群において、進路の一つとして、高卒認定資格の取得や、大学進学等に関心があるとする者がいた。

「家庭」について挙げた者を見ると、デシスタンス群では、現在の家庭生活への関心の強さ、特に、子がいる者については、子の面倒を見ることにやりがいや生きがいを感じている様子が述べられた。再入院群では「家庭」に言及した者は1人だったが、小説に出てくるような平凡な結婚生活を送りたいとして、理想とする将来の家庭について語った。

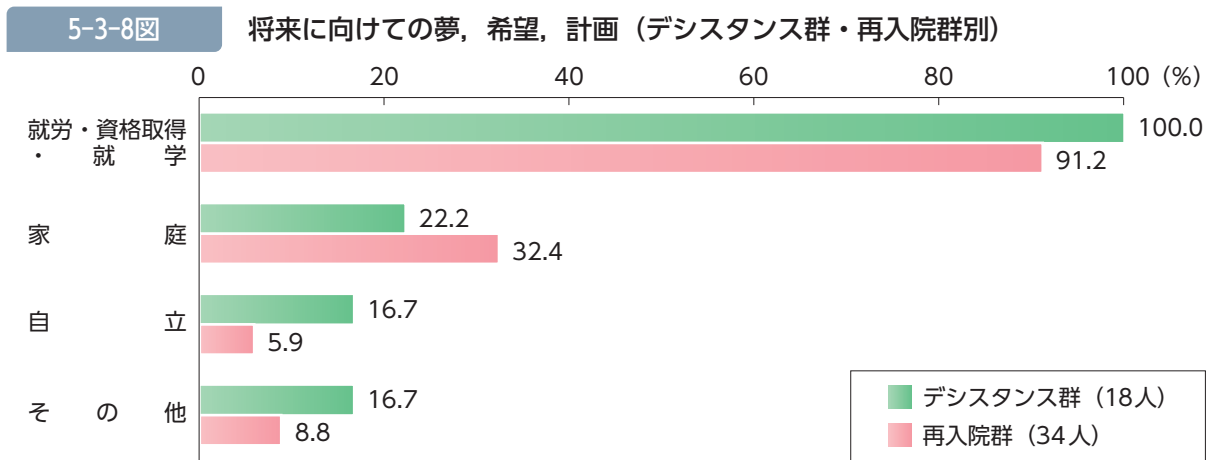
その他、政治や社会情勢等の時事問題に興味があるとする者がデシスタンス群で1人、再入院群で3人いた。再入院群の3人については、殺人事件などニュースで知った特定の事件について触れ、なぜ人がそのような事件に至るのか、その心理的な背景に興味があるなどと述べており、自らが非行に至った心理状況と照らし合わせて考えていると語る者もいた。また、再入院群では、出院後の生活について述べる者も複数人いたが、出院後にどのようなことをするか、ということ自体に興味を持っている事柄として挙げるなど、漠然とした内容を述べる者が目立った。さらに、再入院群では、入れ墨への興味を述べる者や、少年院での毎日3回の食事に興味があるとする者もいた。

特に興味を持っているものがないと答えた者は、デシスタンス群で1人、再入院群で2人であった。

8 将来に向けての夢、希望、計画

5-3-8図は、将来に向けての夢や、希望、計画に対する回答について、各カテゴリーに言及し

た者の比率をデシスタンス群・再入院群別に見たものである。



注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 回答の中で各カテゴリーに言及した者の比率を示している（重複計上による。）。

デシスタンス群では、全員が、「就労・資格取得・就学」に関する内容を挙げており、その他、「家庭」、「自立」に言及している者が約2割いた。再入院群においても、「就労・資格取得・就学」を挙げた者は約9割と最も多く、「自立」を挙げた者の割合は1割に満たず、デシスタンス群よりも少なかったが、「家庭」に言及した者の割合は約3割で、デシスタンス群よりもやや多かった。

両群共に、ほとんどの者が「就労・資格取得・就学」に言及しており、「興味を持っていること」（本節7項参照）の回答とも共通する内容が多かった。就労・資格取得について述べた者は、デシスタンス群で18人（100.0%）、再入院群で31人（91.2%）、就学について述べた者は、デシスタンス群で5人（27.8%）、再入院群で3人（8.8%）であった（双方に言及している場合は、双方に計上している。）。就労・資格取得についてその内容を見ると、デシスタンス群では18人中8人（44.4%）が、当面は現在の職業を続け、研鑽を積み重ねる中で将来につなげていきたいという趣旨であったが、再入院群では、「とりあえず会社を建てたい。とび職の会社か何かも経営したい。」など、目標を述べるだけで、その実現に向けた過程については言及しない者が散見された。具体的な職業名を挙げた者は、デシスタンス群で18人中7人（38.9%）、再入院群で31人中25人（80.6%）であり、再入院群の方が多かったが、「興味を持っていること」と同様、再入院群では、ダンサー、釣りのプロ、俳優など特殊な才能が求められるような職業に就きたいとする者が目立った。就学については、デシスタンス群では、現在通っている学校に

において、成績を上げたい、卒業したいといった、現状に根差した比較的近い将来のことについて語られることが多かった。また、中学卒業だと建築業などの現場でしか働くことができず不利だとして、進学を目指す者もいた。総じて、デシスタンス群は再入院群と比べて、より身近で現実的な事柄について語っていた。

「家庭」について言及した者の内容を見ると、双方の群で、結婚したい、子を持ちたいといった希望が述べられており、特に、「何か悪いこととして遊ぶより、新しい家庭を持ちたい。」「普通に、借金とか変なことはなしで、普通に暮らしたいというのが夢。」など、平穏な暮らしを望む者が複数いた。

「自立」については、両群共に、親元を離れ、自分で仕事をして生計を立てたいなどと述べており、その中で、仕事を継続させることの必要性に触れる者も多かった。

その他、自分が経営者になって少年院出院者等を雇用し、更生の手助けをしたいという者がデシスタンス群と再入院群で1人ずついたほか、再入院群では、保育士、児童養護施設職員などの対人援助職を志す者や、ブライダル関係の職業を目指す者が複数人いた。うちブライダル関係の職業を希望した者は、「今まで人に苦しみを与えてきたから、笑顔を与えられるのがすてきだなって思った。」とその動機を述べた。

第4節 調査の結果

— 平成26年度及び28年度面接調査の比較から見るデシスタンス群の特徴 —

この節における分析の対象は、平成26年度面接調査と28年度面接調査の双方に参加した4人である。この4人はいずれも、平成25年1月から同年3月の間に少年院を出院した後、少年院への再入院や刑事施設への入所がなく、相当の期間、非行からの離脱を維持していることが推察される。デシスタンスを示す4人の調査結果において、これまでの生活の捉え方、自己や周囲の者に対する認識、将来への見通し等にどのような傾向が見られ、また、時間の経過により、どのような変化が見られるかを把握し、非行からの離脱との関わりを考察することを、この節の目的とした。

分析の対象となる調査対象者が4人に限定されており、また、調査対象者が抱く自己や周囲の者に対する認識、将来への見通し等の具体的な変化を見るため、この節では、第2節及び第3節の方法（第2節冒頭参照）とは別個に分析を行い、4人が語ったエピソードをできる限り具体的に紹介するよう努めた。

1 最高の経験

「最高の経験」について平成26年度面接調査の結果を見ると、小学校時代のスポーツ大会優勝や少年院出院後の高校入学試験の合格という達成経験を挙げた者が2人、中学校時代の部活動における他の部員や、少年院出院後に入学した高校の級友との関係という身近な他者との関係や交流（以下、本節で「交流経験」という。）を挙げた者が2人であった。28年度面接調査を見ると、就職決定や就職の第一次試験合格という達成経験を述べた者が2人、少年院出院後、家族が受け入れてくれたことや中学校時代の旧友（いわゆる不良仲間ではない。）との再会・交流等の交流経験を挙げた者が2人であった。

平成26年度面接調査の結果と28年度面接調査の結果を比較すると、同じエピソードを「最高の経験」として挙げる者はなく、また、26年度面接調査では、半数の2人が少年院送致前のエピソードを、他の2人が出院後のエピソードを述べたのに対して、28年度面接調査では、4人全員が少年院出院後のエピソードを述べた。

ただし、同じエピソードではないものの、平成26年度面接調査と28年度面接調査とで、類似した内容のエピソードを挙げる傾向が見られた。26年度面接調査時に小学生時代のスポーツ大会での優勝、入学試験の合格という達成経験をそれぞれ挙げていた2人は、28年度面接調査時

において、就職決定、就職第一次試験の合格という、やはり達成経験をそれぞれ挙げた。また、26年度面接調査時に高校級友との交流、中学校時代の部活動における他の部員との関係という交流経験をそれぞれ挙げていた2人は、28年度面接調査時にはそれぞれ、少年院出院後の家族による受容、旧友との再会・交流等という、やはり交流経験をエピソードとして挙げた。

平成28年度面接調査時に、少年院出院後、家族に受け入れられたエピソードを挙げた者は、28年度面接調査時における他の質問項目（「出院後うれしかったこと」、「影響を与えた出会い」等）においても、少年院出院後の家族との関係や交流等を最も重要な経験として繰り返し述べている。しかし、その者は、26年度面接調査時には、「最高の経験」だけではなく、他のどの質問項目においても、ほとんど家族については言及していない。このことは、家族等の重要な他者との体験を自分の中で位置付け、言語化するのには時間がかかることがあることを示す可能性がある。

2 最低の経験

「最低の経験」について平成26年度面接調査の結果を見ると、教師や両親等の大人に対する不信を挙げた者、高校の級友に対する怒りを抑えられなくなりそうになった経験を挙げた者、少年院送致の決定を受け、家族を悲しませた経験を挙げた者、少年院送致前に高校で級友からいじめ（言葉で級友にからかわれる体験）を受けた経験を挙げた者が、それぞれ1人ずついた。28年度面接調査の結果を見ると、親に対する不信を挙げた者、少年院送致前に感情を抑えられずに仲間に傷害を負わせたエピソードを挙げた者、少年院送致となり家族を悲しませた場面を挙げた者、交際中の女性を裏切った経験を挙げた者がそれぞれ1人ずついた。

挙げられたエピソードの時期に目を向けると、少年院出院後のエピソードを「最低の経験」とした者は、両調査で1人ずつであり、「最高の経験」とは対照的に、少年院出院前のエピソードを語る者が多かった。

平成26年度面接調査で、大人や親への不信、少年院送致の体験を、それぞれ挙げた者は、28年度の調査でもほぼ同様の内容のエピソードを語っており、また、他の2人の者は両調査で対人関係のトラブルを挙げていた。

平成28年度面接調査においては、26年度の調査に比べると、自分の行動やその結果が周囲の者との関係にもたらした影響を「最低の経験」と述べ、内省的な内容の回答をする者が増えている。いじめによる被害を挙げた者は、2年後の調査では、交際相手を裏切り、交際相手に対する罪悪感について語る内容の、内省的なエピソードを挙げており、両調査で大人や親に対す

る不信を述べた者も、26年度面接調査では、大人への不信を契機に自分の生活が荒れたと述べていたのに対して、28年度面接調査では、そのような経過を辿った自分を客観的に振り返ろうとする姿勢が表明されている。このように、「最低の経験」に関する調査結果からも、全体として、他者との関わりにおいて自分の有り様を振り返るという意味での社会性の伸張がうかがえる。

なお、両調査において大人や親に対する不信を挙げていた者は、平成26年度面接調査では、学校教師や両親等の大人一般を不信の対象として挙げていたのに対して、28年度面接調査では、不信の対象が親に絞られている。さらに、28年度面接調査では、「出院後大変だったこと」等の他の項目においても親に対する不信が言及され、親への不信が本人にとって大きな課題であったことが明確に語られている。先に「最高の経験」において、家族等の極めて重要な他者との体験を自分の中で位置付け、言語化するのに時間がかかる可能性を指摘したが（1項参照）、同様のことは「最低の経験」においても言えるのかもしれない。

3 転換点

「転換点」について平成26年度面接調査の結果を見ると、少年院での経験を挙げた者が2人、本件非行の共犯者である先輩と知り合いになった経験を挙げた者が1人、中学校在学中の転居を契機に孤立していったことを挙げた者が1人であった。28年度の面接調査を見ると、少年院での経験を挙げた者が1人、少年院における教官や職場での親方などの信頼できる大人との出会いを挙げた者が1人、少年院を出院したことを踏まえて不良交友を自らの意思で断ち切ったことを挙げた者が1人、出院後の旧友（いわゆる不良仲間ではない。）との再会を挙げた者が1人であり、4人中3人の者が何らかの形で少年院について触れた。

平成26年度面接調査の結果と28年度面接調査の結果とを比較すると、26年度面接調査では、2人が少年院における経験を、他の2人が少年院送致以前のエピソードを挙げていたのに対して、28年度面接調査では、26年度面接調査で少年院送致以前のエピソードを語った2人がどちらも少年院出院後のエピソードを挙げた。また、26年度面接調査で少年院送致以前の体験を挙げた2人は、人生が悪化した転換点を挙げていたのに対して、28年度面接調査では、人生が好転した転換点を挙げた。

平成26年度面接調査から28年度面接調査への内容の推移に目を向けると、両調査で同じエピソードを挙げていた者は1人であり、その者は、少年院での生活を、自分の努力が相応に評価される良い経験と回答していた。その他の3人については、少年院での経験を良い転換点と評

働いていたもう1人の者は、2年後の調査では不良交友の断絶を挙げ、先輩共犯者との出会いを悪い転換点として挙げていた者は、2年後の調査では法務教官及び職場上司等の信頼できる大人との出会いを挙げ、級友からの孤立を挙げていた者は、2年後の調査では少年院出院後の旧友との再会とそれを契機とする交友関係の広がりを挙げており、26年度面接調査と28年度面接調査とで語るエピソードが変わっている。

平成28年度面接調査の回答において、4人全員が他者との出会いや交流に関わる転換点を挙げている。26年度及び28年度面接調査の双方で少年院の経験について挙げた者も、26年度面接調査では少年院在院中に自分の努力が相応に評価されたことを挙げていたのに対し、28年度面接調査では、法務教官、他の少年院在院者、面会に来た家族や教師等との関わりにも目を向けている。このように、より時間の経過した28年度面接調査において、初めて少年院在院時の他者に関わる事柄にも言及するに至っていることから、回答者にとっての社会関係の拡大とそれに伴う社会性の伸張がうかがわれる。

4 出院後大変だったこと

「出院後大変だったこと」について平成26年度面接調査の結果を見ると、両親の不和と前歴（少年院送致処分）に対して後ろ指を指された経験を挙げた者1人、前歴を知る周囲の者との接し方の難しさを挙げた者1人、勉強が難しく、高校入学試験の勉強が大変だったことを挙げた者1人、友達がなかなかできないことを挙げた者1人という結果であった。28年度面接調査の結果を見ると、両親の不和と親への不信を挙げた者1人、職場において嫌いな人との関係を挙げた者1人、高校入学試験の勉強の大変さを挙げた者1人、友人との交際で見栄を張り、無駄遣いで金銭に窮していることを挙げた者1人という結果であった。

平成26年度と28年度面接調査の結果とを比較すると、26年度面接調査でも28年度面接調査でも、調査時点において遭遇している大変さを挙げている1人を除き、3人の者が過去形で大変さを語っている。特に28年度面接調査では、大変さに対処した方法や関わった人が詳しく述べられており、既に乗り越えたということがより鮮明にされている点で、26年度面接調査とは相違が認められる。

平成26年度面接調査から28年度面接調査への回答内容の推移に目を向けると、両調査で高校入学試験勉強の大変さを挙げていた1人を除き、変化が認められる。両親の不仲と前歴について後ろ指を指された経験について語っていた者は専ら両親の不仲と親への不信を、前歴を持つが故の周囲との接し方の難しさについて語っていた者は職場における嫌いな人との軋轢を、友

達ができないことについて語っていた者は友人との付き合いによる無駄遣いをそれぞれ挙げ、エピソードが変わっている。

平成26年度面接調査では4人中2人が、少年院送致という前歴をスティグマとして強く意識しており、これにどう対処するかが、少年院出院後間もない者が直面する課題であることが推察される。また、両面接調査で高校入学試験のための勉強の難しさを繰り返し挙げた者の例からは学習支援の必要性が、28年度面接調査で友人との付き合いで無駄遣いをして窮している者の例からは金銭の使い方等に関する助言の必要性がうかがえる。

5 出院後うれしかったこと

「出院後うれしかったこと」について平成26年度面接調査の結果を見ると、バイクの免許取得を挙げた者1人、前歴を承知しながら職場の親方が採用してくれたことを挙げた者1人、高校入学試験に合格したことを挙げた者1人、本人の非行を知らずながら友達が受け入れてくれたことを挙げた者1人であった。28年度面接調査の結果を見ると、就職が決定したことを挙げた者1人、家族との関係や交流について挙げた者1人、就職試験合格を挙げた者1人、交際相手ができることを挙げた者1人であった。

平成26年度と28年度面接調査の結果を比較すると、26年度面接調査では、「出院後うれしかったこと」として「最高の経験」と共通する話題を挙げていた者は1人であったが、28年度面接調査においては4人中3人までが、「出院後うれしかったこと」として「最高の経験」と共通するエピソードを挙げた。

平成26年度面接調査から28年度面接調査への内容の推移に目を向けると、バイクの免許取得について語っていた者は就職が決定したことを、前歴を承知しながら親方が採用してくれたことについて語っていた者は家族との交流を、高校入学試験合格について語っていた者は就職試験合格を、非行を知らずながら友達が受け入れてくれたことについて語っていた者は交際相手ができることをそれぞれ挙げ、4人全員に変化が見られる。

「出院後うれしかったこと」についても、「最高の経験」と同様、平成26年度面接調査で達成経験を挙げていた者は28年度面接調査でも達成経験を挙げ、26年度面接調査で交流経験を挙げていた者は28年度面接調査でも交流経験を挙げるという傾向が見られる。しかし、28年度面接調査で、就職決定や就職試験の合格という達成経験を「出院後うれしかったこと」として挙げた2人はいずれも、家族や友人が喜んでくれたことについても同時に触れており、身近な者との交流経験についても併せて言及している。達成経験は、自分が成し遂げた成果に対する充実

感だけではなく、周囲の者の肯定的な反応によってその意味を強め、良い経験として蓄積される面があると考えられる。

6 影響を与えた出会い

「影響を与えた出会い」について平成26年度面接調査の結果を見ると、的確なアドバイスをする少年院教官との出会いを挙げた者が2人、適切な行動や仕事の大切さ等について教えてくれた同級生との出会いを挙げた者1人、旧友と再会し、それによって行動範囲が広がったことを挙げた者1人であった。28年度面接調査の結果を見ると、4人中3人が職場の同僚や先輩との出会いを挙げ、そのうちの1人は同時に、特に少年院出院後、「大切に思ってくれていることが徐々に伝わってきた」として家族との「出会い」についても挙げた。職場に関係する出会いを挙げていない残りの1人は、少年院在院中の中学校担任教師との交流を挙げた。

平成26年度と28年度面接調査の双方で、全員がポジティブな出会いを挙げているが、その内容については4人全員に変化が見られた。26年度面接調査で少年院教官との出会いを挙げた者2人のうち1人は、28年度面接調査で職場の先輩や友人との出会いを、もう1人は、学校教師との交流を挙げている。また、26年度面接調査で同級生との出会いや旧友との再会という友人との関係を挙げた2人は、職場の先輩や同僚等との出会いを挙げ、うち1人は家族にも言及している。

平成26年度面接調査では、少年院内の出会いや同級生・旧友との親密な関係を挙げたのに対して、28年度面接調査では、職場において本人が「尊敬できる人」、「学ぶべき人」等として自覚的に選択した他者との関係や交流を「出会い」として挙げた者が多くを占めた。少年院在院中の書信による中学校教師との交流についてのエピソードも、26年度面接調査時ではなく、より時間が経過した28年度面接調査に至って初めて言及されている。以上のように、回答者の社会性の広がりに伴い、「影響を与えた出会い」としての評価が変化しているものと推察される。

7 興味を持っていること

「興味を持っていること」について平成26年度面接調査の結果を見ると、趣味を挙げた者が2人（その内訳は楽器演奏等、スポーツがそれぞれ1人ずつであった。）、将来目標となる職業への関心を挙げた者が1人、当初、興味も趣味もあまりないと回答したが、促されて携帯ゲーム等を挙げた者が1人であった。28年度面接調査においては、全員が趣味を挙げ、ロックバンド

活動を挙げた者1人、ショッピング（下調べをしてより良い商品を買うこと等）を挙げた者1人、特定バンドの音楽を聴くことを挙げた者1人、グループで動画を作成し、投稿することを挙げた者が1人であった。どちらの面接調査においても、不良文化との繋がりや関わりを感じさせるものは、皆無であった。

平成26年度面接調査と28年度面接調査の結果を比較すると、類似した音楽関係の活動について回答した1人を除き、3人は異なる回答をしている。26年度面接調査で、当初、興味も趣味もないと回答していた者も、28年度面接調査では、友人と共に行う動画投稿を趣味に挙げ、全員が年齢相応の趣味を興味の対象として回答した。

8 将来に向けての夢、希望、計画

「将来に向けての夢、希望、計画」に関して平成26年度面接調査の結果を見ると、将来の職業や進路について挙げた者が2人、職業上の技能や実力を高めることを挙げた者が2人であったが、職業上の技能や実力を高めることを挙げた者のうち1人は、同時に「家庭を持って幸せな生活をする」とも言及していた。28年度面接調査の結果を見ると、4人中3人が「家庭を持つこと」を挙げ、残りの1人は、将来、就きたい職業についての希望を挙げた。なお、「家庭を持つこと」を挙げた3人のうち2人は、具体的な結婚相手を想定していた。

平成26年度面接調査の結果と28年度面接調査の結果とを比較すると、両調査で同じエピソードを挙げていた者は2人であり、1人は家庭を持つことについて、もう1人は目標とする職業について言及した。ただし、このうち家庭を持つことを挙げた者は、26年度面接調査においては、同時に職業上の技能や実力を高めることについて言及していたのに対して、28年度の調査においては、専ら家庭を持つことに話題を集中させており、回答に変化が見られた。他の2人は、26年度の調査では、それぞれ、将来の職種の希望、職業上の技能の向上について語っていたが、28年度の調査では、両名とも「家庭を持つ」という希望に関わるエピソードを挙げており、回答が変化している。

このように、平成28年度面接調査の「将来に向けての夢、希望、計画」について、3人の者の回答から「職業関係」が消えているものの、3人のうち1人は、28年度面接調査の「最高の経験」の質問に対して就職決定と回答し、2人が28年度面接調査の「影響を与えた出会い」の質問で職場の同僚や先輩を挙げていることから、彼らにとっての仕事や職場の重要性が低下したわけではないと考えられる。さらに、「最高の経験」の質問に就職決定と回答した者は、「将来に向けての夢、希望、計画」で「家庭を持つこと」を挙げた上で、20歳代前半は「そのため

の基盤を築く時期」と位置付けており、また、「影響を与えた出会い」の質問に対して職場の同僚や先輩を挙げた者のうち1人は、「家庭を持つこと」を挙げた後、そのために条件のより良い職場への転職を検討していることを付け加えており、これらの者が職業を視野に収めながら、「家庭を持つこと」という希望を語っていることが分かる。

平成26年度面接調査と28年度面接調査で同様に将来の職業に関する希望を挙げた1人にも、回答の内容に変化が見られる。26年度面接調査では、ある職種に就くことへの希望を挙げていたが、28年度面接調査では、その職種から具体的な職業を絞り込んだ回答をしており、さらに「最高の経験」等でその職業に就くための試験を受けたことを述べ、夢の実現に向けた具体的な行動を取っていることがうかがえる。

以上のように、平成28年度面接調査では、全体として、26年度面接調査で述べていた職業や進路についての希望を具体的に実現し又は実現の途上にあることを踏まえた上で、新たに見出した希望を述べる傾向が見られる。

第5節 まとめ

この節では、立ち直りの過程にある者が、これまでの出来事や自分自身についてどのように受け止めているか、また、立ち直りについてどのように捉えているかについて、面接調査の結果から明らかになった特徴を質問項目ごとにまとめ、一部については再入院した者との比較や経時的な変化にも注目して分析を加えた上で、少年院や保護観察を始めとする非行少年の処遇の現場における示唆について論じる。

1 回答内容の概要と分析

(1) これまでの出来事や自分自身、将来の見通しについて

これまでの出来事や自分自身、将来の見通しについての平成26年度面接調査におけるデシスタンス群（調査対象者のうち、面接調査実施時点において少年院に再入院していない者）の回答の傾向、再入院群（調査対象者のうち、面接調査実施時点において少年院に再入院していた者）の回答との比較から明らかになったデシスタンス群の特徴及び26年度面接調査と28年度面接調査の回答から得られた経時的な変化の傾向をまとめると、以下のとおりである。

ア 最高の経験

これまでの人生の中で最高の経験を尋ねたところ、デシスタンス群では、対人関係における良い思い出を語った者が大半を占め、その中では家族や友人・知人に言及した者が多かった。また、スポーツ大会の優勝、免許取得といった達成経験について挙げる者や、就労・就学を通じて得た達成感に言及した者も一定数いた。デシスタンス群のうち過半数の者が少年院出院後のエピソードについて語っており、少年院出院後に家族や友人等との良好な関係を実感できる出来事や達成感が得られる体験等を蓄積していることが分かる。

一方、再入院群では、デシスタンス群と比べると、友人・知人について言及した者が多く、家族について言及した者は少なかった。また、暴走行為や薬物使用等の非行や反社会的行動に言及する者も一定数おり、そうした出来事を他者に認められたり達成感を得たりした経験として語った者もいた。

再入院群では、家族よりも友人との関係に傾いている者や、不良顕示的な価値観から離れられない者がいるのに対して、デシスタンス群では、家族と良好な関係を築いている者や、健全な場面で達成感を得ることができている者が目立つ。

2度の面接調査での回答の変化に注目すると、両調査において同じエピソードを語った者はおらず、より新しいエピソードを語る者が多かった。初回の面接調査で対人関係にまつわるエピソードを挙げた者は、その後の面接調査でも対人関係にまつわるエピソードを挙げ、初回の面接調査で達成経験にまつわるエピソードを挙げた者は、その後の面接調査でも達成経験にまつわるエピソードを挙げており、どのような経験を「最高の経験」として感じるかには、人によって一定の傾向がある可能性が指摘できる。また、立ち直りの過程にある者は、日々の生活の中で、新たに達成感を得られる出来事や、対人関係において親密さを感じられるような経験を見出し、人生で最高と感じられる経験を更新しながら、充実感を持って生活していると考えられる。

イ 最低の経験

これまでの人生の中で最低だった経験を尋ねたところ、デシタンス群では、自分が過去に引き起こした非行や問題行動、少年院送致等を挙げる者や、友人・知人とのトラブルに言及する者が多かった。非行等に言及した者の発言からは、非行等により周囲の者に及ぼした悪影響を悔やむ姿勢や、そうした経験を教訓として今後の生活にいかそうとする姿勢がうかがえた。

一方、再入院群でも、自身の非行や問題行動を挙げる者が多かったが、単にその出来事が最悪であったという言及のみで周囲への影響には触れていない者が散見された。また、再入院群では、デシタンス群と比べると家族について言及する者が多く、特に、親による虐待や親の自殺等、家庭内での逆境的な経験についての言及がしばしば見られた。再入院群は自らの行動等に起因する出来事よりも外的環境に起因する出来事を挙げる者が多かった。

これに対し、デシタンス群では、自身の引き起こした行動を人生で最低の経験として捉えている者が再入院群と比べて多いと言える。再入院群の方が、より悲劇的な出来事を経験している可能性も否定できないものの、デシタンス群の特徴として、自身の行動を客観的に捉える視点や、自身の行動の影響と責任を自覚し、同じ失敗を繰り返すまいとする姿勢がうかがえる。

2度の面接調査での回答の変化に注目すると、両調査で非行や少年院送致のエピソードを挙げる者や、当初は友人とのトラブルに言及していたが、その後の調査では少年院送致について言及している者がいたことから、出院から一定期間が経過しても、少年院送致という経験を重大なものとして捉え、その経緯を振り返ることを通じて、同じ失敗を繰り返すまいとする姿勢が強化されていると推察される。

ウ 転換点

人生が変化した「転換点」となった出来事を尋ねたところ、デシスタンス群では、人生が好転した契機（良い転換）について挙げた者が多かったが、人生が悪化した契機（悪い転換）について挙げた者も相当数見られた。良い転換としては、少年院での経験を挙げる者が多く、非行からの離脱の契機や精神面の成長をもたらしたものとして言及されていたほか、担当教官を始めとした少年院職員との関わりについて触れている者が一定数いた。一方、悪い転換では、非行の深化につながったものとして、家族関係の不和や不良交友への傾倒を挙げた者がいた。

再入院群では、悪い転換について挙げた者が多く、デシスタンス群と同様に、非行の深化につながったものとして家族や友人とのエピソードを挙げる者がいたほか、家庭環境の悪化や生活の崩れについて言及する者も多かった。再入院群で挙げられた悪い転換のエピソードは、その半数が中学入学以前の出来事であり、デシスタンス群と比べて、より若い頃の出来事を挙げる傾向があった。再入院群でも、数は少ないが、前回出院した少年院について、精神面の成長や社会性の獲得に役立ったと振り返る者がいた。

総じて、デシスタンス群は人生における良い転換について語る者が多く、現状を肯定的に受け止めていると考えられる。また、少年院を契機として非行からの離脱に向かったとか、内面的に成長したと捉えている者が多く、中でも、法務教官との関わりによる影響に触れている者が一定数いることは、少年院における法務教官との信頼関係を基盤とした改善更生の働き掛けの有効性を示唆するものと言える。一方、再入院群では、悪い転換について語る者が多く、再入院しているという状況を踏まえれば当然とも言えるが、現状を否定的に受け止めていると考えられる。さらに、悪化の契機として若い頃の出来事を挙げる傾向があることを考え合わせると、昔から人生が悪い方向に進んでいると感じ、自分の力ではどうにもならないといった諦めの心境にある可能性もある。それでも、前回出院した少年院での生活を好転の契機として挙げる者もあり、再入院した者にとっても、少年院での経験は人生を好転させるような影響があったものと推察される。

2度の面接調査での回答の変化に注目すると、当初は悪い転換について語っていたが、2度目の面接調査では良い転換について語るようになった者や、両調査において少年院での経験に言及し、2度目の面接調査では少年院での経験と現在の社会生活とのつながりに触れるなど、その影響をより広く捉えるようになった者がいた。健全な社会生活を続ける中で、現状に対してより肯定的に受け止めるようになり、その認識の変化とともに、現状につながる過去の重要な出来事についても、多角的に捉え直すようになっている可能性がある。

エ 出院後大変だったこと

出院後大変だったことを尋ねたところ、デシスタンス群では、就労・就学について、作業の大変さや身体的なつらさについて言及する者や、友人・知人との関係について、自身の少年院送致歴が広まってしまったことや、自身の何気ない言葉が友人を非行に向かわせるのではないかといった懸念を挙げる者、家族関係を維持する上での困難に言及する者がいた。また、そうした困難にどう対処したかを含めて語る者や、困難が自身の糧になったと肯定的に受け止めている者が多かった。

一方、再入院群も、就労・就学や友人・知人、家族といったデシスタンス群と同様の事柄についての困難を挙げていたが、その内容を詳しく見ると、就労・就学について意欲面の問題が目立ったほか、困難にどう対処したかを語る者が少なかった点で、デシスタンス群との違いがあった。

2度の面接調査での回答の変化に注目すると、当初は対人関係における困難について、少年院送致歴があることを知っている同級生等との関係に苦労したというエピソードを語る者がいたが、2度目の面接調査では、そうしたエピソードを語る者はいなかった。出院後、少年院送致歴をスティグマとして意識し、対人関係上の困難を感じるが、一定の期間を経て意識されなくなる場合があるといえる。また、初回の面接調査では触れなかったものの、2度目の調査において、出院直後の両親の離婚を挙げ、つらい思いをしたが家族で乗り越えた経験だと語った者がおり、特に葛藤の大きな出来事については、困難を乗り越え、気持ちの整理がついてから初めて語られる場合があると考えられる。

オ 出院後うれしかったこと

出院後うれしかったことを尋ねたところ、デシスタンス群では、対人関係におけるエピソードを挙げる者が大半を占めた。中でも、家族との関わりに言及する者が多く、家族の存在が非行からの離脱を後押ししたとする者が目立った。また、友人・知人との関わりに言及する者も一定数おり、前歴にかかわらず接してくれたことを好意的に受け止めている様子うかがえた。その他、就労・就学を通じて充実感や達成感を得た経験を挙げる者も一定数を占めた。

一方、再入院群では、友人・知人について言及する者が大半を占め、中には、友人・知人の存在が再非行への歯止めになったと述べる者もいた。家族や就労・就学について触れた者は、デシスタンス群と比べて少ない上に、就労については主に経済面での満足感が語られていた点特徴的であった。

デシスタンス群では、特に家族との関係が良好であり、それが非行からの離脱を後押ししていると考えられる。就労や就学といった健全な場面において達成感を得ている様子もうかがえ、これらは、「最高の経験」の回答内容から明らかになった事項とも共通している。

2度の面接調査での回答の変化に注目すると、両調査において同じエピソードを語った者はおらず、より新しいエピソードを語る者が多かった。初回の面接調査で対人関係にまつわるエピソードを挙げた者は、その後の面接調査でも対人関係にまつわるエピソードを挙げ、初回の面接調査で達成経験にまつわるエピソードを挙げた者は、その後の面接調査でも達成経験にまつわるエピソードを挙げており、これらは、「最高の経験」における回答内容の変化とも共通している。加えて、達成経験を挙げた者で、当初は自身の達成感にのみ言及していたが、2度目の面接調査においては、その出来事によって周囲の人が喜んでくれたことにも言及するようになった者がおり、健全な場面での達成経験の積み重ねが、周囲の人との関係にも良好な影響を及ぼし、両者の好循環によって、満足感や充実感を得る場面が広がったケースと見られる。

カ 影響を与えた出会い

自身にとって一番大きな影響を与えたと思う出会いについて尋ねたところ、デシスタンス群では全員が肯定的な影響を及ぼした出会いに言及しており、その相手として、法務教官や保護司を挙げた者や、友人・知人を挙げた者が多く、職場の上司等を挙げた者も一定数いた。法務教官や保護司については、特定のアドバイスよりも、相手との関わりそのものや、相手の受容的な姿勢を肯定的に受け止めている者が多く、友人・知人については、自己変容のきっかけや非行からの離脱を導いた存在として言及する者がいた。職場の上司等については、仕事に真剣に取り組む姿勢を見習おうとする者が目立った。

再入院群でも、影響を与えた出会いは特になかった者を除き、全員が肯定的な影響を及ぼした出会いに言及しており、その相手として、友人・知人を挙げた者が半数を占め、次いで、法務教官や保護司等を挙げる者が多く、職場の上司等を挙げる者は少なかった。再入院群の中には、暴力団関係者を挙げる者もあり、暴力団関係者との関わりは良くないと述べてつも、自分が相手に必要とされ、役に立つことができた経験として振り返っていた。

デシスタンス群では、総じて、法務教官や保護司を始めとして、非行からの離脱を導いた存在を、自身にとって大きな影響を与えた相手として重視している者が多く、少年院や保護観察における働き掛けが、直接的な関わりを終えた後も立ち直りの支えになっていると考えられる。

また、デシスタンス群では、職場の人間関係の中で身近なモデルを見つけている者がおり、それが仕事に真面目に取り組む姿勢につながっていることがうかがえるのに対し、再入院群では、暴力団関係者との関わりを、自身が必要とされた経験として言及し、再入院後もその関係を支えとしている者もおり、非行からの離脱のためには、社会において活躍できる場や、健全なモデルが必要であることが示唆される。

2度の面接調査での回答の変化に注目すると、両調査において同じ相手を挙げた者はおらず、初回の面接調査では友人を挙げ、2度目の面接調査で家族について言及する者もいた。人生に影響を及ぼした重要な相手は、固定的なものではなく、その時々との関係や重視するものによって、誰から影響を受けたかという認識や相手の位置付けが変化していく可能性がある。

初回の面接調査で法務教官を、2度目の面接調査で職場の同僚を挙げた者の例では、当初は非行からの離脱を導いた法務教官が最も影響を受けた相手として認識されていたが、出院から一定の期間が経過し、新たな環境において自身の居場所を見付け、周囲との信頼関係を築くことができ、身近な相手からの影響が強く意識されるようになったものと考えられ、そうした場や相手を見いだすことの重要性が指摘できる。

キ 興味を持っていること

面接調査時点で興味を持っていることを尋ねたところ、デシスタンス群では、スポーツや音楽等の趣味を挙げる者や、就労・資格取得・就学について言及する者が多く、子の世話や成長について言及する者も一定数いた。一方、再入院群でも、趣味を挙げる者に次いで就労・資格取得・就学について言及する者が多かったが、家庭について言及する者は少なかった。また、再入院群では、就労といっても俳優や投資家になりたいという夢を語る者や、漠然と出院後の生活に興味があると述べる者がおり、現実味や具体性の乏しさが目立った。

2度の面接調査での回答の変化に注目すると、当初は希望する職業を挙げた者や特にないと答えた者も、その後の面接調査では趣味を挙げており、年齢相応の趣味を楽しもうとする姿勢がうかがえる。

ク 将来に向けての夢、希望、計画

将来の夢や希望、将来に向けた計画について尋ねたところ、デシスタンス群では、全員が就労や就学、資格取得について言及しており、家庭を持つことや自立することにも言及した者が

一定数いた。就労や就学、資格取得については、現在の仕事や学業を続けてステップアップし、将来の夢につなげたいといった回答が多かった。

一方、再入院群でも、ほとんどの者が就労や就学、資格取得に言及しており、家庭を持つことに言及した者も一定数いた。就労や資格取得についての回答を見ると、具体的な職種を挙げる者はデシスタンス群よりも多かったものの、特殊な才能が求められるような職種を挙げる者が目立ったほか、目標を述べるだけでその実現に向けた過程について言及がない者も散見された。

総じて、デシスタンス群は再入院群と比べて、現状に根差した比較的近い将来のことを語る傾向があり、地に足の着いた堅実な将来設計をしている様子がうかがえた。

また、2度の面接調査での回答の変化に注目すると、両調査で同じ職業への憧れを語った者もいたが、仕事を中心とした内容から家庭を持つことを中心とした内容へと変化した者もいた。ただし、2度目の面接調査において仕事に関する言及がなくなった者についても、他の質問項目への回答を見ると、就職が決定したと述べるなど、仕事への関心が低下したというよりは、職業人としてある程度の前進が見られ、その先の将来として家庭を持つことに目が向き始めたものと考えられる。

(2) 非行からの離脱、少年院生活・保護観察の受け止めについて

非行からの離脱や少年院生活・保護観察の受け止めについて、平成28年度面接調査におけるデシスタンス群（調査対象者のうち、面接調査実施時点において少年院に再入院していない者）の回答の傾向をまとめると、以下のとおりである。

ア 非行をやめようと思ったきっかけ

非行をやめようと思ったきっかけを尋ねたところ、家族との関係を挙げ、これ以上迷惑を掛けまいと決意したという者や、逮捕や少年院送致という処分経験そのものがきっかけとなったという者が一定数いたほか、充実感の得られる仕事や将来の目標ができたことの影響に触れる者もいた。

イ 非行をしないでいられる理由

非行をしないでいられる理由を尋ねたところ、家族との関係だけでなく、就労・就学について言及する者が多く、職場の人間関係が支えであるとする者や、仕事に対する責任に言及する

者もいた。また、非行についての否定的な見方や、出院後の自己像の変容に触れる者もいた。

ウ 非行をやめようという気持ちが強くなる時

どのような時に非行をやめようという気持ちが強くなるか尋ねたところ、少年院の生活と対比して、自由な生活の有り難さを評価し、それを維持したいという趣旨の回答が目立った。また、現在の対人関係や積み上げてきたものに言及し、非行によってそれを失いたくないとする者もいた。

エ 立ち直りを邪魔するもの

出院後にあった立ち直りを邪魔するような出来事とその対処法について尋ねたところ、以前交友関係にあった不良者からの誘いを挙げる者が一定数おり、不良交友を絶つことで対処したという者が目立った。また、つらいときや苛立ちを感じたときに危険が高まると認識し、ストレスを解消する方策を見いだしたり、対人スキルを活用したりしている者も見られた。

オ 立ち直りのために我慢したこと

立ち直りのために我慢したことを尋ねたところ、回答の内容は多岐にわたったが、遊びや以前の不良仲間との交遊を挙げた者が一定数おり、仕事に打ち込むことによって、遊んだり非行のことを考えたりする時間を作らないようにしたという者が複数いた。その他、感情的にならないようにするための方法に言及する者もいた。

非行からの離脱に関する回答からは、家族の悲しみや処分を受けることで自由を失うといった非行のマイナス面に目を向け、離脱を決意する者が多いこと、少年院の生活等で感じる不自由さは、自由な生活を維持したいという気持ちにつながり、離脱に寄与することが指摘できる。また、就労・就学等を通じて新たな環境に適応し、人間関係を構築していくことにより、離脱を支える要因が拡大するとともに、これを失いたくないという思いから離脱の意思が強化されている様子が見えてくる。

一方、非行からの離脱を阻む要因としては、不良交友の影響が大きく、遊興や不良仲間から距離を置くことが離脱につながっていた。また、感情的になる場面を危険場面と認識している者もおり、適切なストレス解消法やトラブルを避ける対人スキル等によって対処していることが分かった。

カ 少年院生活の受け止め

少年院の生活が現在の自分やこれまでの人生にどのような影響を与えたかを尋ねたところ、プラスの影響とマイナスの影響の両方が挙げられたが、総じてプラスの影響を受けたとする者が大半を占めた。

プラスの影響としては、精神面の成長を挙げる者が多く、担当教官等の職員との関係に言及する者もいた。また、資格取得や勉強の面で役に立ったとする者も一定数見られた。

マイナスの影響としては、時間を失ったとする者が多く、交友関係の断絶や家族や周囲の人々の信頼の失墜等、当時の人間関係に及ぼしたダメージを挙げる者も多かった。ただし、マイナスの影響を挙げる者の中にも、少年院送致になっていなければ今の自分はないとする者が多かった。

少年院に収容されたことで時間や当時の交友関係などを失ったと考える一方で、主に精神面の成長を実感し、少年院生活を現在の自分になくしてはならない経験として捉えていることが明らかになった。このことは、「転換点」についてのデシスタンス群の特徴とも共通しており、少年院における法務教官との信頼関係を基盤とした改善更生の働き掛けの有効性を示唆するものと言える。

キ 保護観察の受け止め

保護観察が現在の自分やこれまでの人生にどのような影響を与えたかを尋ねたところ、総じてプラスの影響を受けたとする者が大半を占め、マイナスの影響を挙げる者は限られており、影響はなかったとする者もいた。

プラスの影響としては、保護司や保護観察官を身近な相談相手と捉え、その人柄や関係性を評価する者が多く、有益な助言を受けたとする者も一定数いたほか、定期的な面接が生活の区切りとなったとする者もいた。マイナスの影響としては、面接に要する手間や時間が挙げられていた。保護観察については、少年院生活と比べるとマイナスの影響は強く意識されておらず、保護司や保護観察官との関係性が肯定的に受け止められており、立ち直りを支える存在として受け入れられていたものと推察される。

ク 昔の自分について

非行をしていた頃と現在の自分の違いについて尋ねたところ、全員が、現在の自分は非行をしていた頃と比べて良い方向に変化していると回答した。そのきっかけとして、少年院におけ

る矯正教育を挙げる者、家族や友人等の重要な他者との関係を挙げる者が多かった。また、非行をしていた頃の自分に掛ける言葉としては、非行を思い止ませようとするものがほとんどであり、非行のマイナスの影響に言及する者や、非行は人としてやってはいけないもの、無意味なものだとする者がいた。

こうした発言からは、対象者が、非行をしていた頃とは異なる価値観を身に付けつつあることや、新たに築き上げつつある他者との関係が、非行とは相容れない健全なものであり、それを対象者自身も認識していることがうかがえる。

ケ 調査協力の理由

面接調査に協力した理由を尋ねたところ、自分を振り返るチャンスになるといった「振り返り」を挙げた者が半数を超え、面接調査を受けることにより立ち直りの決意を新たにしようとする姿勢が見られた。また、自分のこれまでの経験を他の少年の立ち直りに役立てたいなどの思いを挙げる者もいた。

2 処遇上のインプリケーション

この項では、前項でまとめた面接調査の結果を踏まえ、非行少年の処遇に取り組む際に参考となると思われるポイントを示す。

なお、面接調査の結果を処遇に応用するに当たっては、当然のことながら制約がある。まず、面接調査に参加した者の数が多いとは言えず、特に、平成26年度面接調査と28年度面接調査の双方に参加した者が4人に留まったことから、この調査の結果を一般化することには、おのずと限界が伴う。また、面接調査が少年鑑別所（再入院者については少年院）において、法務省職員によって行われたことが、回答内容に何らかの影響を及ぼしている可能性は大いにある。しかし、このような制約を十分に踏まえつつ、デシタンス群に特徴的な傾向を抽出し、処遇の在り方を検討する上で参考となる情報を得ることはなお有益であると考えられる。

(1) 離脱における少年院生活及び保護観察処遇の役割

「転換点」、「少年院生活の受け止め」、「保護観察の受け止め」で示したように、非行からの立ち直りの過程にある者の多くが、少年院生活や保護観察処遇を、精神面での成長を促し、非行からの離脱を支えたものと認識していた。また、「影響を与えた出会い」等で示したように、法務教官や保護司、保護観察官等の処遇者についての言及からは、処遇者の親身な関わりが対象

者に大きく影響を及ぼしていることがうかがえ、処遇者と対象者との信頼関係の構築が処遇の基盤となり得る。

離脱を促進するための処遇としては、まずは、「非行をやめようと思ったきっかけ」で示したように、少年院送致等の処分経験そのものが、非行からの離脱を決意する契機として働く側面もあるため、処分を受けた段階で、対象者が非行によって失ったものや周囲への影響に目を向けさせ、離脱の意思を固めさせることが重要である。その後は、対象者に寄り添った親身な関わりによって、処遇者と対象者との信頼関係を構築することが、対象者それぞれの問題性に応じた働き掛けをより有益なものにするだろう。また、「立ち直りを邪魔するもの」で示したように、立ち直りの過程にある者自身が、立ち直りを阻む要因として不良交友や感情的になる場면을挙げていたことから、不良交友や対人トラブルなど、再非行の危険性が高まるような要因や場面を認識させ、それを避ける方法や危険な場面を切り抜けるためのスキルを身に付けさせることも重要である。出院後は、引き続き、親身な関わりによって、新たな環境への適応や対人関係の構築を支援することが離脱の促進につながると考えられる。これらは、既に処遇の現場で実践されているものであり、今回、非行からの離脱の過程にある者自身の発言から、その処遇の有用性が支持されたと言える。

(2) 家族関係とその留意点

「最高の経験」、「出院後うれしかったこと」、「非行をやめようと思ったきっかけ」で示したように、家族と良好な関係を築き、家族に受け入れられ支えられていると実感できることが、非行からの離脱に大きな役割を果たしていると考えられる。

他方、「出院後大変だったこと」で示した例のように、家族関係に問題を抱えている者の中には、その問題について語ることも難しい場合があるため、処遇に当たっては、対象者の抱える複雑な心情に十分に配慮して、家族関係の改善に向けた働き掛けを行う必要がある。

(3) 達成経験とそれを支える人間関係

「最高の経験」、「出院後うれしかったこと」で示したように、仕事や学業を始めとした健全な場面での達成経験は、非行からの離脱に寄与していると考えられる。「少年院生活の受け止め」で示したように、少年院での資格取得や勉強が役に立ったとする者もあり、少年院において資格取得等に取り組ませ、達成経験を積ませることは、出院後も健全な場面で努力するための足掛かりとなり得るという点においても重要な働き掛けであると言える。

また、「影響を与えた出会い」、「非行をしないでいられる理由」で示したように、身近なモデルとして職場の上司、先輩、同僚等の与える影響は大きい。職場の人間関係が良好であることは、単に仕事上のサポートを得られるというだけでなく、対象者の仕事に対する意欲を向上させ、責任感を持たせる効果もあり、就労における満足感や達成感につながっていると考えられる。

処遇においては、就労実績だけではなく、対象者が頼れるような先輩や上司の存在等、職場の人間関係という面からも職場への定着の度合いを把握し、就労場面で満足感や達成感を得られるよう指導していくことが必要である。

（４）過去の出来事の捉え直し

「最低の経験」で示したように、再入院した者には、児童期の、外的要因に起因する取り返すことができない悲劇的な出来事に言及する者が多く見られる。それに対して、立ち直りの過程にある者では、自分の行為とそれが周囲に及ぼした影響に言及する者が多い。また、「転換点」で示したように、再入院した者には、ネガティブな結果に目が向く傾向がうかがえる。少年院在院中という状況からは当然とも考えられるが、こうした物事に対する悲観的な見方は、自棄的な振る舞いや意欲の乏しさにつながり、非行からの離脱を阻害する要因となり得る。

処遇の対象者が、例えば、過去のつらい出来事と非行との関連について語るような場合には、一連のエピソードの中で本人の意思で変えられる部分に着目させ、今後の自分の在り方を考えさせたり、目標を持たせたりする働き掛けが意味を持つと考えられる。

（５）将来設計

「将来に向けての夢、希望、計画」で示したように、再入院した者は、職業名等の希望を挙げても、その実現に至る過程や方法にはあまり触れず、それが夢に留まっているものが多い。それに対して、立ち直りの過程にある者では、希望を実現するための過程に目を向け、実現へ向けての当座の目標を語り、当初の目標が実現しつつある段階で、次の新たな目標を見いだす傾向がある。

処遇の現場で、目標を持つよう働き掛ける際、目標実現のためのステップを考えさせ、当座の目標を見いだすよう促すことがよく行われるが、そうした実践の有効性が面接調査の結果からも示唆される。

また、再入院した者が現実味の乏しい夢を語る背景には、地道な努力を軽視し手っ取り早く

成功を収めようとする姿勢や、自分の努力が将来実を結ぶと感じられない自己効力感の乏しさがうかがえる。現在の自分の状況から実現可能なスモールステップの目標を立て、それを達成していくことは、地道な努力の尊さを実感させるとともに、将来を自分の力でコントロールできるという感覚を回復する上でも意味があると考えられる。

(6) 自己についての語り

「調査協力の理由」で示したように、今回、面接調査に協力した者の多くは、立ち直りの決意を新たにするなどの理由から、自分自身の「振り返り」の機会を求めていた。処遇場面においても、対象者に、非行から離脱しそれを持続してきた過程を語らせることは、離脱の意思を強化させるとともに、離脱の道のを前進していると実感させるという点においても、大きな意味を持つと考えられる。